

国立国語研究所学術情報リポジトリ

What kinds of entities can demonstrative pronouns refer to?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 太郎, 鈴木, 美都代, TAKAHASHI, Tarō, SUZUKI, Mitsuyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001117

コソアド代名詞は

どんなものをさしうるか

——直接的な用法のばあい——

高橋 太郎

鈴木美都代

TAKAHASHI Tarō, SUZUKI Mitsuyo: What Kinds of Entities Can Demonstrative Pronouns Refer to?

要旨：(1) 日本語の指示代名詞には、主としてものをさすコレ、ソレ、アレ、ひとやものをさすコイツ、ソイツ、アイツ、主として場所をさすココ、ソコ、アソコ、主として方向をさすコチラ、ソチラ、アチラなどがある、それらの語頭音節コー、ソー、アーに注目してまとめると、システムをなしている。そのシステムはさらに指示的な形容詞(いわゆる連体詞)、副詞にもひろがっていて、これらの指示語の全体系はコソアドとよばれている。

(2) このシステムは、従来、コ系、ソ系、ア系が話し手と聞き手によってつくられる場のなかで、どのような緊張関係をもち、どのようにさしわけられるか、という面から研究されてきた。しかし、コレ、ソレ、アレがなにをさし、ココ、ソコ、アソコがなにをさすかといった語尾形式の共通性とさすものの関係に注目した研究はなかった。

(3) 本研究は、-レ系、-イツ系、-コ系、-チラ系が、どのような存在論的なカテゴリーをさすのにつかわれているかについて、おもにシナリオを材料にしてこまかくしらべたものである。

(4) 調査の結果、カテゴリーの基本的な分担がかなりあきらかになり、また、さし方やコ・ソ・アのちがいがいなどの条件で変化が生じることもわかった。この研究は、名詞のカテゴリカルな分類にも寄与することになるだろう。

キーワード：コソアド、代名詞、指示語、ダイクティック、場

Abstract: Demonstrative pronouns in Japanese include the following four groups: (i) *kore, sore* and *are* (mainly for things); (ii) *koitsu, soitsu* and *aitsu* (for humans or things); (iii) *koko, soko* and *asoko* (mainly for places); and (iv) *kochira, sochira* and *achira* (mainly for directions). These groups can be cross-classified into the following 2 sets of series: (i) *ko-, so-* and *a-*series, based on the word-initial syllables, and (ii) *-re, -itsu, -ko* and *-chira* series, based on the word-final segments.

In contrast to previous studies which only looked at the differences among the series of the first set, the present work examines the differences among the series of the second set in movie scripts. We elucidated the primary referents for each series and also the conditions that affect them. This research also contributes towards a categorical classification of nouns.

Key words: KOSADO, pronoun, demonstrative, deictic, reference

0	はじめに	4
0.1	問題	4
0.2	方法	6
0.3	コソアド代名詞のさしめず対象のカテゴリーの分類	7
1	コレ・ソレ・アレがさすもの	8
1.1	ものをさすばあい	8
1.2	ひとをさすばあい	16
1.3	場所をさすばあい	17
1.4	時間をさすばあい	18
1.5	ものごとをさすばあい	18
2	コイツ・ソイツ・アイツがさすもの	20
2.1	ひとをさすばあい	21
2.2	ものをさすばあい	23
2.3	ものごとをさすばあい	24
3	ココ・ソコ・アソコがさすもの	25
3.1	場所をさすばあい	25
3.1.1	近称・中称・遠称になるばあい	26
3.1.2	自称・対称・他称になるばあい	29
3.1.3	地域をさすばあい	30
3.1.4	いれものをさすばあい	31
3.2	箇所をさすばあい	32
3.3	場所の反映物をさすばあい	34
3.4	集団をさすばあい	35
3.5	場面をさすばあい	36
3.6	時間をさすばあい	37
4	コチラ・ソチラ・アチラがさすもの	38
4.1	場所をさすばあい	38
4.1.1	近称・中称・遠称になるばあい	38
4.1.2	自称・対称・他称になるばあい	39
4.1.3	地域をさすばあい	41
4.2	ひとをさすばあい	42
4.3	集団をさすばあい	43
4.4	ものをさすばあい	44
4.5	ものごとをさすばあい	45
4.6	方向をさすばあい	46
4.7	側(がわ)をさすばあい	48
5	まとめ	49
6	資料	56

0 はじめに

0.1 問題

ふつうの名詞が対象の特徴にもとづいてその特徴を名づけた単語であるのに対して、コソアド代名詞は対象の特徴によって区別はされるが、その特徴によってさししめすのではなく、話し手との関係によって、あるいは話し手と聞き手によってつくられた場のなかのどこに位置するかによってさししめす単語である。たとえば、鉛筆、けしゴム、ナイフをふつうの名詞でさすときは、それぞれを「鉛筆」「けしゴム」「ナイフ」としかいえないのに対し、これらをコソアド代名詞でさすときには、おなじ鉛筆（あるいは、けしゴム、ナイフ）が、「コレ」になったり、「ソレ」になったり、「アレ」になったりする。

コソアド代名詞も対象の内的な特徴にまったく無関心なわけではない。「コレ」がものをあらわし、「ココ」が場所をあらわし、「コッチ」が方向をあらわすというのは対象の内的な特徴のちがいによるのである。ただ、その特徴のとらえかたが、ふつうの名詞のように個別的な^注のではなくて、その対象が存在論的にどのカテゴリーに属するかによって名づけられるのである。だから、第1表のなかのコソアド代名詞は、「コー」「ソー」「アー」などの部分が話し手との関係、あるいは話し手と聞き手によってつくられる場のなかの位置によるさしかたにかかわり、「ーレ」「ーイツ」「ーコ」「ーチラ」の部分が存在論的なカテゴリーによる名づけにかかわっているといってもよいだろう。

それでは、ふつうの名詞でさしうるものはすべてコソアド代名詞でさせるだろうか。この問題は直接的な（ダイクティック）用法と文脈的な用法でことなる。文脈的な用法のばあい、コソアド代名詞はすでにふつうの名詞でいわれた対象をさすのであるから、どんなものでもさししめすことができるし、さらに、句や節や段落から文章におよぶすべてのものをさししめすことがで

注) ふつうの名詞も固有名詞にくらべれば、特徴のとらえかたが一般的である。

きるので、さしうる範囲はひじょうにひろい。それに対して、直接的な用法のばあい、さしめしうるものがかなり制限される。たとえば、遠くにみえる木の枝にとまっている小鳥の名をたずねるときには、「あのとり」または「あの木にとまっているとり」といって、「あれはなんですか。」といきなりいうことはないだろう。これはもののカテゴリーの問題ではなくて、指示というはたらきの限界にかかわる適用の問題だろう。つまり、知覚的に弁別できることが必要なのであろう。また、床の間にいけられた花のにおいを「これはいいですね。」といったとしても、花あるいは花のいけ方への評価ととられるだろう。においや音などをさしめせないわけではないが、そこには一定の話しの場合での状況が必要となる。

このような、さしうる対象の範囲をみていくと、いろんな現象にぶつかる。たとえば、「こちらはわたしの友人の〇〇さんです。」の「こちら」は三人称であるが、「こちらは毎日いそがしい。」の「こちら」は一人称である。ところが「こいつ」というのは三人称しかない。また、遠くのひとだかりを指さして、「なんだろう、あれは？」というときの「あれ」は、ふつうの名詞の一単語ではいえないようなことをさすだろう。こうしたことをめぐって、コソアド代名詞はどんなものをさしうるかという問題を設定することができる。この稿はそうした問題にこたえることを目的とする。

この問題ととりくむばあい、どんなものをさしえないかということも問題にできるが、今回はシナリオの会話文のなかにつかわれた直接的な用法のさしている対象を分析したので、「さしうるか」のほうだけを問題にした。「さしえないか」のほうは、コソアド連体詞をあつかったのち、コソアド連体詞にかざられた名詞（たとえば、「あのとり」「このにおい」など）をコソアド代名詞にかえられるかをかんがえるなどの方法でしらべることができる。

コソアド連体詞のはたらきも、けっして一様ではない。たとえば、「こんなけしゴムがほしい。」というときには、「こんな けしゴム」という二単語が一定の属性をもったけしゴムをあらわしているが、「いま、こんな子がき

たよ。」といて、手のひらを水平にして下にむけ一定の高さを保つときは、「こんな」だけで一定の属性をさしめしている。また、コソアド代名詞であらわされるものは直接にさされた特定のものをあらわすが、コソアド連体詞と名詞とのくみあわせでは特定のものばかりではなく、名詞であらわされるものが同類の代表をしめしているようなばあいもある。

これまでのコソアド研究はコ系とソ系のちがいが、ソ系とア系のちがいがだけを問題にしていたことが多かったが、今回はコソアド代名詞がどんなものをさすことができるか、という観点からしらべたものである。

コソアドの品詞は以下の表のように代名詞、いわゆる連体詞、副詞にわたっている。

表1 コソアドの品詞

	コソアド 代名詞	いわゆる 連体詞	副詞
コ系	コレ コイツ ココ コチラ	コノ コンナ コウイウ コウイッタ	コウ
ソ系	ソレ ソイツ ソコ ソチラ	ソノ ソンナ ソウイウ ソウイッタ	ソウ
ア系	アレ アイツ アソコ アチラ	アノ アンナ アアイウ アアイッタ	アア
ド系*	ドレ ドイツ ドコ ドチラ	ドノ ドンナ ドウイウ ドウイッタ	ドウ

*この表以外の疑問称
「なに」「だれ」
「いつ」「いくら」
「いくつ」などをふくめて、疑問詞とよぶことができるが、今回の分析の対象からははずす。

0.2 方法

シナリオからの用例カードをつかい、会話文のなかにかわれた直接的な用法のばあいにかぎって考察する。直接的な用法のばあいはコソアド代名詞をつかうとき、指さしなどによる身ぶり（随伴する非言語行動）のありなしにも注目する必要がある。特に、話し手と聞き手がおなじ場所にいるときに

は、指さし、目による合図などの身ぶりをともなうことが多い。完全ではないがシナリオのト書きにかかっているばあいがあるのでそれも参考にした。

この研究は、これ自身としても意味があるが、さらに他の言語との対照研究においても基本資料となりうるとおもわれる。この論文をそういうふうにつかうばあいには、できるだけこまかい記述をしておく方がいいとおもい、多少冗漫にみえるが、用例をたくさんあげておいた。

0.3 コソアド代名詞のさししめす対象のカテゴリーの分類

さすもののカテゴリーカルな性質もコソアドの体系にかかわってくる。カテゴリーーとしては、つぎのようなものをたてた。簡単に規定しておく。

もの…具体的なもののうち、いきものをのぞく具体的なものをいう。

いれもの…具体的なもののうち、ものをいれるはたらきをもった道具で、
もの性と場所性をもったものをいう。

のりもの…人やものをはこぶための道具で、これももの性と場所性をもっている。

もの、ものごとの量、程度…「これで」「これだけ」のようにもの自身ではなくそのものの量や程度をいう。

ひと…具体的なもののうち、ひと、いきものをいう。

集団…なんらかの人たちからなりたっている団体、集合体をいう。

場所…ある、ものやことが存在したり、おこなわれたりするところをいう。
せまい地点もひろい地域も含む。

箇所…ものの部分を場所のようにとらえるばあい、箇所という。たとえば、「(カメラを差し出して) ここ押すだけでいいですから」のようなものを箇所という。

方向…面したり、進んだり、さししめしたりするむき。

側(がわ)…対になっているものの一方、長さのあるものの片一方の端、また一つのものに対になった側面があるものの一方の側面、境界線の一方の領域、方向など。

場面…話し手、聞き手で構成される話しの場面をいう。

時間…過去から未来への時間的な流れをいう。

現象・事件…自然や社会の現象や事件をいう。この稿のなかでは「ものごと」とのべたところもある。

反映物・サイン…新聞の記事、文字、写真にうつったものなどの記号、反映物、指であらわすサインなど。

コソアド代名詞でさしめられる多くのものは、一言でいうならば、具体的なものである。多くのばあい、話し手と聞き手は互いに相手の姿をみることができるところにいて、指さしなどの身ぶりをともないながら、コソアド代名詞をつかう。

1 コレ・ソレ・アレがさすもの

コレ・ソレ・アレはもの、ひと、ものごと、場所をさす。このうち、ものをさす用例が一番多い。話し手と聞き手は互いに姿がみえる位置にいる。

1.1 ものをさすばあい

コレ・ソレ・アレは物理的に存在する具体的なものをさす。このものは手でふれたり、手で持つことができる。また、ものによっては身につけることができる。相対的に大きいのりものや建造物、自然の川、石など地物も、コレ・ソレ・アレであらわすことができる。

コレ・ソレ・アレがものをさすばあい、ふつうは指さしなどの身ぶりによる表示がある。

話し手と聞き手で構成される話しの場はほとんどが話し手と聞き手が近くにいるばあいである。

コレ・ソレ・アレのでかたは、指示者やものの所持者（話している時点にものをもっているひと）がきめてになることが多いが、所有者（話している時点にはかかわりなく、ものを所有しているひと）がきめてになることもあ

る。

○話し手や聞き手もっているもの [コレ, ソレ]

話し手もっているものをコレ, 聞き手が手にもっているものをソレでさししめす。手にもてるものであれば, どんなものでもコレ, ソレでいうことができる。聞き手もっているものをさすばあいは, 指さしなどの身ぶりをともなうことがあるが, 話し手もっているものをさすばあいは, 手でもっているものをさしだしたり, もちあげたりすればよい。

- レー1 (上着のポケットから, 絵葉書を二通取出す) これが琴平, これが伊勢からです。[砂の器]
- レー2 そうか, 腹へってるのか, じゃこれを食うかい。(と菓子を出す) [女生きてます]
- レー3 「これで抑えていらっしやい」「ありがとう」志乃からハンカチを受け取って眼を抑える。[忍ぶ川]
- レー4 「忙しそうだね, 資料探し?」「あら, 今日は」「これ, いつか君が欲しいとっていたスペイン製の手袋」包みを女子職員のポケットへすべり込ませる。[華麗なる一族]
- レー5 「おれ, 字がかけないんだ」「習えばいいじゃありませんか, そうだ, これを使ってください」と一冊の辞書を手渡す。～「…私をふくめて, そんな沢山の人たちの恨みをほらしてくださいよ」「だっておれには, そんな学はないもの」「(辞書をさして) それをつかって, 本を読んで勉強するんです。…」[狭山の黒い雨]
- レー6 美馬, 書類カバンから一通の書類を出し, 大介に渡す。～「お舅さん, お読みいただいたら, これは消滅していただかないと…」[華麗なる一族]
- レー7 「みんな遠慮なく。おれはこっちだよこっち…幾江, コップにしてくれ」コップを受け取ると, 自分でゴボゴボ酒を注ぎ, その黄金色の液体を, にんまり糸のように眼を細めて電灯にすかして見る。「(一口飲み) うまい!…まったくこれがあるから生きておれるようなもんだな」[人間革命]
- レー8 少年達, いそいそとランドセルを開けて中から給食の袋をとり出す。「何だそれ」「給食だよ」「バターまずくってくえねえんだ」[男はつらいよ]

接尾辞「ラ」をつけて複数のものをあらわしている用例もある。

- レー9 今西, 手紙と葉書の束を取り出す。「これらに依りますと, 三木と千代吉の

文通は約二十四年間…警官を退職し、岡山県の江見に帰った現在まで続いてお
ります。～」[砂の器]

レー10 綿貫、盟約書を小島に渡す。「これに署名、捺印してくれ」「はい」…小島、
思いつめた顔を上げる。「専務お願いします、もう一度お考え直し下さい。これら
の書類を阪神銀行に渡すことは、大同銀行を丸ごと敵に売り渡すようなもので
す。」[華麗なる一族]

○話し手や聞き手がふれているもの [コレ]

話し手がふれているものをコレでさししめす。手でもてるものもあるが、
比較的大きなものを手でふれながらコレでいうことができる。また、ある
ものの部分に手でふれてさししめすこともある。聞き手がふれているもの
の用例はなかった。

レー11 観測窓はこれ、後尾にもあります。これは水中テレビ、パノラミックで視界
は百四十度…[日本沈没]

レー12 それからここにボタンがある。用事があったら、これを押すんだぞ。[人間
革命]

レー13 これが便所（腰掛けのふたをあけると水洗便所、机のふたをあけて）この下
が洗面所だ。[人間革命]

レー14 弾七、いま一つの菴包みを開き始める。「お婉さま、これは、薬草でござい
ましょうか？」[婉という女]

レー15 「どうしたの、これ？」ユキの手は徹男のチョン切れた小指に触れているの
だ。[津軽じょんがら節]

○話し手や聞き手が身につけているもの [コレ、ソレ]

話し手が身につけている衣服、アクセサリーなどをコレ、聞き手が身に
つけている衣服などをソレでさししめす。

レー16 「～、何よその服、お葬式よ」「あ、これか、いや俺も気になったんだけど
何しろ旅先だろ、だから服位は勘弁して貰ってよ、気持の問題だからな」[男
はつらいよ]

レー17 寧子が、定紋入りの油単を掛けた衣裳ダンスの並ぶ暗い部屋で、衣裳をいっ
ぱいひろげて、嬉しそうに肩にあてたりしている。二子が来る。「お母さま、
相子さんを知らない？」「あら、二子さん。これ、どう？…銀平さんの結婚式

にとおもって、京都のえり善に特別注文して仕立てていただいたのですけど…
少しお派手かしら？」[華麗なる一族]

レー18 廷吏にたすきをとれといわれて、浜元フミヨさんが抗議している。「あの…
支援の人に分かるように、これ（たすき）をわたしゃ掛けとります。」[水俣]

レー19 空気女、タオルを借してやる。その時、少年、空気女の腕にある腕時計に気
がつく。「あ、時計だ、それ、オモチャ？」「これ？本物だよ」[田園に死す]

レー20 「…おばさん、それ、とってもきれい」少女の美しい目が竜子の胸のペンダ
ントを見つめる。[女生きてます]

○話し手や聞き手の近く、またははなれたところにあるもの [コレ、ソレ、
アレ]

話し手の近くにあるものをコレ、聞き手の近くにあるものをソレ、話し
手からも聞き手からも遠いところにあるものをアレでさししめず。

レー21 ややあって、課長入って来る。刑事Aの合図を受け、一つずつ臭いをかいで、
「これだろう（と指す）」[狭山の黒い雨]

レー22 陳情書をめくっている浮池市長。「(マイクに) これ何ですか？今日の集会の
録音？こまります、こらえて下さい」[水俣]

レー23 今西、息を殺して桑原の広げた地図を見る。「これがその音韻図です。ホラ、
島根県のこの出雲の…」[砂の器]

レー24 テーブルには、納品書と、手荷物切符と、小荷物切符がおいてある。「遺体
の財布の中に、こういう納品書がはいっていたんです、これをそのとき調べて
もらえば、身元不明者として、扱われなくてもすんだのです、それがみえなか
ったんですか」「(首をひねって) こういうものがあったかな」[わが道]

レー25 妻さすが、お茶の用意をして、現れる。血染めの衣を見て顔をややしかめる。
「またそれですか。もういいかげんにしたらどうなんです。」[戒厳令]

レー26 「冗談ですよ、せいぜい飲んでいって下さいな(ボトルに気付き) あら、それ
亀井さんの…」ドアが開き、亀井さんが入って来る。[八月の濡れた砂]

レー27 兵隊と人足が鐘を牛車に積む。人垣の前列の数人が、手をのばして方丈さん
がしたように鐘をなでる。「あれもやっぱり大砲や弾丸になるんかや」～黙っ
て、いとおしむような、抗議するような眼で見ている人々。[時計は生きてい
た]

レー28 「あっ、あれなんだ」ひらひら舞い降りて来る 無数の紙片。[時計は生きて
いた]

レー29 晴美が一雄の手を引っ張って近づく。ウィンドウの中の背広。「わあ、ステキ。

あれ一雄さんにピッタリね」[狹山の黒い雨]

○話し手や聞き手の近く、または遠くにある自然物 [コレ, アレ]

話し手と聞き手が同じ場所において、その近くにある道や、川などの自然物をコレ、はなれた場所にある自然物をアレでさししめず。ソレでさししめず用例はなかった。

レ-30 多美、堤の道から、下の田圃の石をつんだ畔道へと降りはじめ。 「多美ちゃん。これ、近道？」 [忍ぶ川]

レ-31 岸边 婉、寛、将 その前に呆然とたたずんでいる。婉、呟く。「これが…これが川というものだったのですね」 [婉という女]

レ-32 障子が開け放され、向こうに月明の芦の湖が見える。～「よく見て下され、この日本の山や湖を…これが本当に沈むんですか、田所さん、～」 [日本沈没]

レ-33 芦の湖を見渡す広大な庭に逸品の石が二つ並んでいる。～「これはどうも…横の秩父石も結構ですね」「いや、あれは大きいだけが取柄だよ」 [華麗なる一族]

○話し手や聞き手の近く、または遠くにある建造物など [コレ, アレ]

話し手と聞き手が同じ場所において、その近くにある建造物をコレ、はなれた場所にある建造物をアレでさししめず。レ-37の用例は、同じ対象をさすのに、場所としてとらえたココと、建造物としてとらえたコレがつかわれている例である。

レ-34 洲崎橋の上 運河には幅広い石の橋がかかっている。「これが、洲崎橋」志乃は、焔になめられたあとが、黒い縞になって残っている石の欄干をなつかしそうに手のひらで、びたびた叩く。 [忍ぶ川]

レ-35 ベニヤがはがれて、隣の中年女がのぞいて怒鳴る。「何するんだい、人の家ぶっこわして」「これが家かよ、豚小屋じゃねえかッ」 [女生きてます]

レ-36 若い警官が運転し、今西が揺られながら窓外を見ている。「あれが亀嵩の駅です」今西、頷き、田圃の中にポツンとしたその建物の駅舎を見る。 [砂の器]

レ-37 「腹がへったなァ。ここへ入って何か食うか」少女、『寿荘』の怪しげな様子を見て、「これ、旅館ね」 [遊び]

ソレが建物などをあらわす用例はなかったが、話し手と聞き手が近くにい

るばあい、そこからすこしはなれたところにある建物などをソレであらわすことは可能だろう。

話し手と聞き手がはなれているばあい、聞き手のいる建物などをソレでいいあらわすことはできるとおもうが、実際には、そういう広い空間での会話というのはまれで、して、コソアドでいうならソッチ、またはソコというふうに場所をしめすようになるかもしれない。話し手は聞き手をも含めた一つの空間をコレでいいあらわすのだろう。

○話し手や聞き手の近く、または遠くにあるのりもの [コレ、ソレ、アレ]

話し手の近くにあるのりものをコレ、聞き手の近く、または聞き手のちものであるのりものをソレ、両者からはなれたところにあるのりものをアレでさししめす。空間をもつということからのりものをものと区別したが、さししめし方はもののばあいと同じである。

レ-38 まあ、平田くん、そう言わずに一度乗ってみろよ、これは日本では、第一号のガス気球なんだ。そうめったに乘れるシロモノじゃないぞ。[宵待草]

レ-39 カントク、玄二達の車に気づいて眼を光らせ、「君、それ君達の車か?」「え? ええ、まあ」[宵待草]

レ-40 「おい、何だありゃ?!」 江川が指さす窓外を気球がフワフワ降りてゆく。[宵待草]

レ-41 「九州まで、オートバイ?」「うん」「あんなちっちゃいので大丈夫?」「あれが、俺には似合いさ」[やさしい日本人]

○話し手や聞き手がさししめすものの反映物 [コレ、ソレ]

ものに似たものに、ものの反映物がある。絵、写真、新聞の記事などのような何らかのものを反映しているばあい、物理的存在としてはものをさすが、反映されたものは必ずしもものとはかぎらないので、ものとももの反映物とは区別する。たとえば、「コレはおかあさんの写真です」というばあいの「コレ」は物理的存在としてのもの（一枚の写真）をあらわすが、おなじものをみて、「コレはおかあさんです」というばあいの「コレ」は写真に反映されたものとしてひとをあらわしている。「場所」が反映され

ているばあい、たとえば、住所がかかれた紙切れをみせて、「東京での住所はココですから」というばあい、さしかたはものをさすばあいとおなじであるが、反映されているものが「場所」であるためにコレではなく、ココがつかわれることになる。また、コレでひとをさすばあいは、敬語をつかう必要がある場面では子供とか身内の者しかささないが、写真に写されたひとは、どんなひとでもコレでさししめすことができる。また、レ-46のように、文字と文字でかかれた内容のくいちがいが問題になるような用例もある。

コレ・ソレ・アレであらわされるものの反映物は原則的にはコソアドのあらわれかたはものとおなじである。

- レ-42　そして戒厳令は被虐趣味だとすれば、これが在郷軍人のイメージだ。(写真を放りだす) [戒厳令]
- レ-43　写真立ての写真はコックの服を着てキャッチボールをしている父親…昔のだからまだ若い。その写真立てを、食堂ふうのソースやコショウの容器を置いたテーブルの中央に置く。～「あ、このときのピッチャー俺なんだ」「これがいちばん好きなの」[妹]
- レ-44　吉村、そそくさとポケットから写真を取り出し、小母さん、モ、若しかしたらこの人では？」「(写真を見て眼をむく) あ、これ石井さんです」[砂の器]
- レ-45　「本当はこの、教科書の出たところの近くの川ではないのか、俺は何でもわかるのだよ」と地図をみせる。一雄のぞきこんで、「ああ、これは川じゃないですよ、木の根が畑に入らないように掘ってある溝ですよ」「それじゃ、その溝かも知れんな。石川君この溝を書いてみてくれないか。おそらくここにあると思うな」[狭山の黒い雨]
- レ-46　戸田、チョークを取り上げ、黒板に大きく「犬」の字を書く。生徒たち、妙な顔をする。「(取り澄まし) さ、犬だ、ほしい者は持ってゆけ！」「先生、それは字じゃないですか？」生徒たち、口々に、それは字だよ、犬じゃない、持ってゆけないよ、などと不平げに非を鳴らす。「ハハハハハ、そうだよな、これは本当の犬じゃない、だから持ってはゆけない。つまり犬というものを表す字にすぎない…いいね」[人間革命]

○話し手のあらわす記号 [コレ]

何の脈絡もなしに、にぎりこぶしをだせば、それは単なる「手」「こぶ

し」であるが、ジャンケン遊びの中では「石」をあらわす。また、親指と人差し指でつくった輪は日本では「お金」をあらわす。というように身ぶりがある一定の場面においては物理的存在とはちがったものをあらわすことがある。ものにかぎらず、抽象的なことがらまでもあらわすことができるのである。

- レ-47 国彦、言われて懐に手をやる——財布が無い。～お新、国彦に財布を投げ返す。「六区じゃ有名なコレだ」と指をマゲル。[宵待草]
- レ-48 「何だい、十日も寄りつきやがらないで、どっかにいいコレでもできたのかい？」小指で玄二の顔をつつくお新。[宵待草]
- レ-49 丸い灰皿を脳に見たてて、その黒焦げぶりを説明する。「…だけでも解剖しなしたときはねえ、半分以上脳がやられとりましたねえ、まあ脳のあれがこの位あるとねえ（灰皿の丸さを指でかこみながら）これだけあると、（指で小穴を作って、脳細胞をかたちづくってみせ）この丸さがねえ、ちょっとあの蛸についているイボがあるでしょうが…蛸についているイボに穴があいているでしょうがねえ、あれといっちょん（一寸も）変わらないですよ。あれがずっとこう丸くなって（とイボイボをつなげて脳全体の大きさを示し）まあ、ほんと、これだけあると、まあ良えところが四分の一でしょうかね。…」[水俣]

聞き手があらわす記号をソレであらわすのは文脈的な用法になるのだろうか、直接的な用法には用例はなかった。

○ものの量・程度 [コレ]

- デヤ - ダケのかたちで量や程度の側面からみた話し手や聞き手の近くにあるものの用例がある。

- レ-50 米や麦の袋、トマト、胡瓜、薯、いんげん等…リクサクから取出して置く少女。見守る一座の五人。～「おつりです…四百円です。みんなで」「これで四百円？」[旅の重さ]
- レ-51 女物の長袖のシャツ、厚手の靴下、カーデガンが何枚か包装される。「これだけいいんですね」「あ、これも…」長いマフラーを取る。[約束]
- レ-52 二人はテーブルの上に鉄平の原稿と㊟書類を置く。「誠に残念ですが、お役に立てないことになりました」「(見つめて) どういう事ですか？…この間はお

二人とも…」「わが党の委員会でいろいろ検討したんですが、これだけの資料では無理だという結論に達しましたのでね、悪しからず」[華麗なる一族]

コレデ、コレダケなどはまだ完全には「もの」としての意味が失われていないので分類の対象にしたが、つぎの用例はかなり副詞化したものである。参考までにあげておく。いずれの用例も直接的な用例とはいえないものである。

レ-53 「僕にすれば、日本という国には、随分お礼奉公をしたような気がするんです。これだけ国家にサービスしたんだから、ボーナスを」「ボーナス？」「結婚するんです」[日本沈没]

レ-54 「兄上さま、貞四郎どの、そしてわたくし…僅か七人の家族に医師が三人とは贅沢なことでありますな」「姉上の言われるように、われらが家族は、ほんとに恵まれておりますな。これほど名医が揃うていては、どのような病もつけこむすぎがありますまい」[婉という女]

レ-55 父は、その雰囲気うち消すように、「結婚式だども、式は、あすの晩げに、内輪ばりにすべとおもってやんした…身うちも遠くさいるし、この村にゃあ、それほど親しいつき合いもありやせんしな」[忍ぶ川]

レ-56 「所長、あれほど責めたても吐かないところをみると、今度ばかりは松島は無実なのじゃ…」[女囚 701 号さそり]

1.2 ひとをさすばあい

コレ・ソレ・アレがひとをあらわすばあい、コチラ・ソチラ・アチラとちがって、三人称をあらわすものだけである。ソレの用例はなかったが、たとえば話し手からすこしはなれたところにいるひとをさして、「これが私の息子で、それは兄貴の子です」のようにソレが三人称のひとをあらわすばあいもありうるだろう。ふつう、コレ、ソレでさされるひとは、子供とか身内の者など敬語をつかう必要のないものであるが、遠くにいるひとをアレでさすばあいは、相手が敬語をつかう必要のないひとであれば、目上のひとでもさすことができる。

コレ・ソレ・アレがひとをさすばあいは、ひともものとしての側面をもっている。ものとしての側面が強調されればコレ、ソレ、アレであらわされる

ことが多く、ひとの側面が強調されればコノひと、ソノひと…という形がとられるのではないだろうか。

コレ、アレがひとをあらわすとき、話し手と聞き手は近くにいるばあいにかざられているが、一例だけ電話による会話で、話し手の近くにいる子供をさして聞き手にむかってコレといている例があった(レ-57)。これは、話し手の意識として聞き手が近くにいるものとみたのか、聞き手の存在とは関係なく、さされるひとが話し手の近くにいるのでコレといったのか、わからない用例である。複数のひとをあらわすものはなかった。

○話し手の近く、または話し手や聞き手からはなれたところにいる三人称のひと [コレ, アレ]

レ-57 モシモシ、母ちゃん、美由紀、ウーンひとりで産んじやった私、～子供は女の子、混血だわ、これ、うん、まあ、しょうがないがね、[極私的エロス]

レ-58 (笑って) これ(と樽を指し)がけむたがってたんでしょ、昔から反抗するのが好きでね [男はつらいよ]

レ-59 悪いけど、俺、しばらく休暇もらったよ。これが俺の新しい女房だ。[田園に死す]

レ-60 哲郎の隣の卒業生Aが、脇腹について耳うちする。「おい、みろ、あれが潮田をふった女だ」と、顎をふる方へ、哲郎は朦朧とした目をすえる。[忍ぶ川]

レ-61 「あの、一緒にいる女の人は」「誰かしら、ひょっとすると、あれが田所佐知子かも」[砂の器]

レ-62 あれ、兄キ、あそこん所に立ってるべっぴん、あれ、誰？ [男はつらいよ]

レ-60～62の、アレでさされるひとは、「女の人」とか「誰」とかということばがあることによって、ひとであることがわかるが、つぎの例は、動かない人間をさして、ものとしてみたようにもおもわれる。

レ-63 「見て、あれ!!」指さす方を見ると、木立の向こうの一際高い大木から、人間がブラ下がっている。近寄ってゆく二人。[宵待草]

1.3 場所をさすばあい

コレ・ソレ・アレが単独で時間・空間をあらわすことはないが、コレヨリ、

コレマデという形であらわされたとき、時間・空間をさすばあいがある。空間的なものには、コレヨリにかぎって場所をあらわしている例が一例あっただけである。文語ふうな用法である。

○話し手や聞き手のいる地域 [コレ]

レ-64 「すえなる村は遠いのか?」「はい、これより北に向かって四里ほど入った、物部川に沿った村にございます」「四里…これより四里…」[婉という女]

1.4 時間をさすばあい

時間をさすものには、コレカラ、コレマデ、コレヨリ、コレデなどがあるが、これらの多くのものは副詞化しているとおもわれる。しかし、参考のために以下に用例をあげておく。

○話し手にかかわる時間 [コレ]

レ-65 (すずの手をゆっくりとねじあげ) いいか、私がそうだとすれば、お前もそれを恐れているんだ。そうする事で、これまで私達が何とか保ち続けてきたものが、失われてしまうのではないかという予感を、お前も持っているのだ。
[戒厳令]

レ-66 「いずれ追って御沙汰があると思うが…ではこれにて」使者、言い終って立ち上る。婉、するどく呼び止める。「お待ち下さいませ」[婉という女]

レ-67 「な、さくら…いくら馬鹿な俺だって潮時つてものを考えてるのよ…これ以上柴又にいたって俺々辛くなるばかりだもん…お前達に迷惑をかけるのも眼に見えてるしよ…いずれその中、筋書き通りになるのがオチだろ」[男はつらいよ]

1.5 ものごとをさすばあい

コレ、アレがものごとをさすばあい、話しの場合は、話し手と聞き手が近くにいる時にかぎられ、話し手、聞き手のいる場面での出来事、状況、状態をあらわすのにつかわれている。自然現象をあらわす用例もあった。ソレは文脈的な用法なのか、直接的な用法には用例はなかった。

○話し手や聞き手のいる場面での出来事、状況 [コレ、アレ]

- レー68 ベッドも洋服タンスもすべて荷造りされて、発送されるばかりになっている。
大介が入ってくる。「帰ってきたのかね」「これはどうしたことですか？」[華麗なる一族]
- レー69 ソクサと表へ飛出し、二屯トラックに満載した引越荷を下ろしはじめる。
「あんた、これは一体どういうことなの」[女生きてます]
- レー70 岩佐が窓を開けて曇った空を見上げている。上司が、眠そうに立っている。
「これが戒厳令下の空ですか…?」「戒厳令下さ、もちろん、ただ見ただけでは誰もそうだとはおもわない。」[戒厳令]
- レー71 京の街のネオン・サインが一斉に消え、大文字山の山腹に“大”の字が燃えあがる。綿貫、開け放たれた障子からその火をみる。「つまり、お望みはあれですな…“大の字”は大同銀行の“大”…“小が大”を喰う“大”」[華麗なる一族]

○話し手や聞き手のいる場面での状態や属性 [コレ、アレ]

- レー72 「おめえ、本当に素人か?」「(豊たちに) 今日これでやめた。みんな帰ってくれ」背広のやくざ、いきなり徹男の腕をギュッとねじあげ、チョン切れた小指を掴む。「素人かよ、これで!」[津軽じょんがら節]
- レー73 ライフルを構え居丈高になって怒鳴る古谷。「出て来い! 出て来ないと容赦なくぶっ殺すぞ!!」「気狂い犬!! これを見な!!」縛り上げた人質の河野の半身を押し出し、後頭部に銃口を突きつける。[女囚701号さそり]
- レー74 二人が、馬に乗って、ポクポク行く。その後を自動車が、つかず離れず、尾いてくる。「(挑発的に) 何もできないわねあれじゃ」[宵待草]
- レー75 康が同い年ぐらいの二人の女の子とままごと遊びをしている。「あーあ、なんてこった。康のやつ、また…」いかにも嘆かわしいという顔。「あれで、きんたまさげてるのかよう」[時計は生きていた]

○話し手や聞き手からはなれたところでおこる自然現象 [アレ]

レー77は文脈的用法かもしれない。

- レー76 その光りの上のほうの外れるあたりで、なにか巨大なものが盛り激しく動いている。緑色がかった濃密な泥雲で、～「ラ、乱泥流だッ!!」「(もう泣き声だ) こんな深海底で、それに、それにあれは、日本列島の地殻の海溝の岸からッ!!」[日本沈没]
- レー77 「あの音は…?」姉妹、その音の方を窺う。「川で…川の音にちがひありませんぬ」「川の音…あれが川の音でございますか…あのような怖ろしい吠え声

をあげて…」婉、不意に川に向かって走り出す。[婉という女]

つぎの用例もものごとをあらわしているとおもわれる。この種の用例は多い。

レ-78 「とても食えるもんじゃないよ、可哀想で…」「可哀想?」「見ろよ、ちっちゃな体で大きな目をせい一杯ひらいて、親子兄弟重なり合って、いとおいしいじゃないか」「お客さんが心がやさしいんですね」「(ニヤニヤし乍ら)お姐さん、気をつけた方がいいよ、これが、こいつの女にモテる手なんだから…」[女生きてます]

レ-79 「課長、カバンが見つからないという電話がありました」「それみろ(一雄の方へ向いて)俺の予感が的中したな。これで石川君は俺に嘘はつけないな」[狭山の黒い雨]

レ-80 橋の上へやって来た二人は、顔をみあわせて、どちらからともなく、ふっと笑い立ちどまる。「ずいぶんあるいちゃったね」「ええ。でも、これであたし、胸の中がははれられましたわ。あたしのことは、全部あなたにみていただきました。これですっかりです。…ああ、いい気持」[忍ぶ川]

レ-81 岩本先生の指揮で、児童たちがフィールドを耕している。「こりや、婆さんとこの壕掘りよりつれえや」[時計は生きていた]

レ-82 雨戸を打ち、はずす。踏み込もうとした時、中で灯がつき、ねまきのままの鈴木貫太郎とその妻が現れる。将校2、ピストルを構える。「お命を頂戴にありがとうございました。私怨ではありません。これは私怨ではありません…。」[戒厳令]

レ-83 「当行の恥を話す様ですが、三雲頭取のことを、日銀から天下って一年たったら、絹のハンカチーフが絹の雑巾に成り下がったなんて、酷評する役員も当行にはいるくらいですから」「これはますます手厳しい」[華麗なる一族]

レ-84 笠原に治療を受けている守。「いててて」「こんなに腫れるまで瘦我慢してるなんて、あきれたやつだ。これじゃ抜かなくてもよい歯も抜かなくちゃならない」[時計は生きていた]

2 コイツ・ソイツ・アイツがさすもの

コイツ・ソイツ・アイツがさしうるものはコレ・ソレ・アレがさすものと似ている。ひと、もの、ものごとをさすのにつかわれ、特にひとをあらわすのに多くつかわれている。話しの場もコレ・ソレ・アレであらわすときと同

様に、話し手と聞き手は互いに相手の姿がみえるような場所にいる会話の場面である。文体的な特徴としては、会話文に特有で、男性によってつかわれることが多い。

2.1 ひとをさすばあい

コイツ・ソイツ・アイツがひとをさすばあい、コレ・ソレ・アレが三人称のひとだけをあらわすのところが、コイツには、二人称的なニュアンスをもって独立語としてつかわれるものがある。また、接尾辞「ラ」をつけて複数の人をあらわすことができる。

○話し手の近くにいる聞き手 [コイツ]

話し相手であるから、指さしなどはなくてもいい。

ツ-1 こいつ…！聞いているのか！面々上げろ。[女囚 701 号さそり]

ツ-2 その時、二階から三味の音が聞こえてくる。「なかなか粋だなや」学生Aは道化で、上を指し、「おら、あつつの方がいいな、先輩」「こいつ…」[忍ぶ川]

ツ-3 「大臣がなさるのなら我慢するわ。さあ、突いて頂戴。十米ぐらい若水をとばしてみせるわ」「こいつ、図に乗りおって」笑い。[華麗なる一族]

○話し手の近く、または遠くにいる三人称 (単数) [コイツ, (ソイツ), アイツ]

話し手の近くにいる話し相手ではないひとをさすばあいには、指さしなどの身ぶりによる表示があるのがふつうである。コレのばあいとちがって、コイツのばあいは、子供や身内のひとをさすとはかぎらない。

ツ-4 男A、はね起きると、寄って来た通行人二、三人に大声でわめく。「け、警察だ！呼んでくれ！（少年を指して）こいつを捕まえるんだ」[遊び]

ツ-5 田淵君、こいつはわしの娘婿なんだが、若僧のくせに今帝國製鉄のむこうをはって高炉をぶっ建てようとしている。[華麗なる一族]

ツ-6 「こいつが倅でして…」一雄、風呂敷包みをつつ持っておどおどしている。[狭山の黒い雨]

ツ-7 押し込まれて、入って来るナミ、冷い眼で周囲を見廻す。その視線は、ピタリ片桐の上に止る。片桐「(はねかえして) さあ、みんな、こいつをひん剝いて吊しまおうじゃないか…！」[女囚 701 号さそり]

- ツ-8 「もう、金もねえぞ…（しのをあごで指して）少し無駄使いが過ぎるんじゃないか、あいつ」[宵待草]
- ツ-9 それを見て低く囁き合う大塚たち。「なんてしぶといんだろ…」「あいつは人間じゃねえ…」「あの化け物のおかげで、こっちまで殺されるよ」憎しみの視線が次第にナミに集中してゆく――。[女囚701号さそり]
- ツ-10 清のもち出した赤いワンピースを着こんで、汗みどろのマモルがとびはねている。マモル、時々そのワンピースの袖で汗を拭ったり、ハナをかんだりする。「あいつ、又拭いてやがる。兄貴の嫁さんのなんだがなあ」清、恨めしそうに遠くのマモルを見ている。[八月の濡れた砂]

ひとをさすばあい、用例にはソイツの例はなかったが、コレ、アレがひとをさすばあいと同様に、話し手や聞き手からすこしはなれたところにいるひとをさすばあいにはソイツがつかわれるとおもわれる。

- ツ-11 あっ！スリだ、そいつだ、その男だ！つかまえてくれ。[作例]

○話し手や聞き手の近く、または遠くにいる三人称（複数）[コイツラ、アイツラ]

接尾辞「ラ」をつけて複数のひとをあらわしている。

- ツ-12 大塚たちは、ふらふらになった河野らを後手にとって引たてている。「こうなったら暴動だよ！こいつらを人質にして倉庫へ籠るんだッ！」[女囚701号さそり]
- ツ-13 こいつらな、昔の仲間よ、日暮りの焼鳥屋でバックリ逢っちゃってな、俺、金がねえからおごって貰っちゃった。[男はつらいよ]
- ツ-14 （河野たちを指し）あいつらはもう使いものにならないけど、もうひとつお楽しみがあるってことさ…[女囚701号さそり]
- ツ-15 ふと見ると向こうの方で三人程の少年達が面白そうに遊んでいるのが見える。「ははァ、あいつらが仲間に入れてくれねえんだな、よおし、そいじゃな、おじさんともっと面白いことして遊ぼうじゃねえか〜」[男はつらいよ]

コレ・ソレ・アレがひとをあらわすばあいは、用例はすべて三人称の単数であった。接尾辞をつけてコレラとかたちでひとをあらわしているものは直接的な用法にはなかった。

次の用例は発言の直前まで話し手や聞き手のみえるところにいたひとをさしている例である。文脈的な用法に近いかもしれない。アイツの例しかない。

- ツ一16 「うるせえ。なめるなよ、俺を」とふり向くと、少女の姿は消えている。「どこへ行ったんだあいつ」と青くなって踊る若ものたちの間を探し回るが、どこにも少女はいない。[遊び]
- ツ一17 「そうだ。駅前にもコーヒー屋があったな。あっちの方がうまいんじゃないか」と、駅の方へ去る。三人、キョトンと見送っている。「何だい遠回りして行く気か」「そうだよ。――馬鹿だねえ、あいつは」と言っ、ギョッとする。[男はつらいよ]
- ツ一18 男B、出ていく。Aに耳打ちして、二人、行ってしまう。～「何だい、あいつら」「ばかだなあ、公安に決まってるじゃないか」[やさしい日本人]
- ツ一19 「(頬をそめて) もうお休み下さい。お嬢さま」「そうね」二人出てゆく。「バカヤロー、何だあいつら」とひっくり返る。[宵待草]

2.2 ものをさすばあい

コイツ、ソイツがものをさすばあいも、もっているものをさしだすような身ぶりをともなうことが多い。アイツの用例はなかった。一定の空間をしめるのりものや大きな穴などもコレ…と同様、ものの側面をもっているものとみた。

○話し手もっているもの [コイツ]

話し手もっているものをコイツでさししめす。ソイツの用例がなかったが、聞き手もっているものをソイツでさすことができるだろう。

- ツ一20 少年、ビールをその中に注ぎこみ、「よく冷えてらァ、こいつはうまいぜ」少女のコップとカチリと合わせて、ぐいっと一息に飲む。[遊び]
- ツ一21 少年の手から両手でポップコーンを受け取る少女。「ありがとう」少年更にコココーラの瓶を少女におしつけ、「食いすぎてのどが渴いたらよ、こいつを飲みな」[遊び]
- ツ一22 戸田、喉をヒクヒクさせながら盃を受けて一杯飲む。～「～きっとまだ体になじまないんだよ」～「あなたの体のことを考えたら、これからもずっとなじまないほうがね」「バ、馬鹿な！こいつに縁がなくなるんだったら、いっそのこと死んだほうが～」[人間革命]

○話し手の近くにあるもの [コイツ]

話し手の近くにあるもの（動物）をコイツでさししめす。用例はすくない。

ツ-23 「一匹は死んだ…もう一匹は逃げた。（机の上のシラミを見て）こいつは死んだから逃げられない。あいつは生きていて、命があったから…じゃ、こいつの命はいったいどこへ…？」[人間革命]

○話し手や聞き手がのっているのりもの、聞き手がつくっている穴 [コイツ、ソイツ]

話し手や聞き手が一緒にのっているのりものをコイツでさししめす。聞き手がつくっている穴をソイツでさししめす。

ツ-24 野こえ山こえ、ユラユラ飛んでゆく気球 ゴンドラの中の三人 「へへ、飛ぶものだな、こりゃ」「しかし、おい、寒いな」「ウム、そうだな、どうすりゃ降りるんだ、こいつ？」[宵待草]

ツ-25 そうか…そのつもりなら死ぬまでやるんだな。そいつを埋め終わったら、また新しい穴を掘るんだぞ！[女囚701号さそり]

2.3 ものごとをさすばあい

用例はコイツの例だけだった。話し手、聞き手の目のまえにある仕事がコイツであらわされていたが、抽象的な動作、状態などは表現しにくいのかもしれない。

○話し手のあらわす仕事 [コイツ]

ツ-26 「一生懸命やらァ、二、三年で半人前になれるんじゃないですか」「ちょっとこいつをやってみろ」梅本、ジャガ芋をむかされる。[女生きてます]

次の例は、文脈的なものと直接的なものとの中間だろう。

ツ-27 待っていた少年、出て来た兄貴に、「どうでした？」「お前、スケをコマしたのははじめてだろう、やっと半人前になったな。ほめてやるぜ」「へへ、どうも」「パーツ工場の女なんて男に飢えてるんだ。こいつを皮切りにどしどしひっかけろ」[遊び]

3 ココ・ソコ・アソコがさすもの

ココ・ソコ・アソコは場所、ものの箇所、集団、場面、時間をさす。このうち、場所をさす用例が一番多い。ソコ、アソコは場所をさす用例だけだったが、文脈的な用法にはものごとや集団をさす用例もみられる。ココは直接的な用法が多い。

話しの場は、話し手と聞き手が近くにいる場面でも、話し手、聞き手が互いに姿がみられない場面でも、場所をさすばあいはいはつかわれる。

場所をさすばあいの指さしのありなしについても考慮する必要がある。たとえば、話し手と聞き手が同じ建物のなかにいるとき、話し手と聞き手がいる場所をあらわすのに指さしなしでココとすることができるが、屋外で話し手と聞き手が同じ場所にいるとき、遠くの場所をさすばあいは、多分、指さしなしではアソコということとはできないだろう。

話し手と聞き手が近くにいる、すこしはなれた場所をさすばあいは、指さしがあるのがふつうである。指さしだけではなく、話し相手にさす場所がわかるように顔を向けるとか、あごをしゃくるとか、という身ぶりをともなうこともある。話し手と聞き手をはなれた場所にいるとき、話し手のいるココも、聞き手のいるソコも、指さしなしでいうことができる。地域をあらわすばあい、話し手と聞き手がいる場所からはなれた地域をさすとき、指さしやその他の身ぶりをともなう。

3.1 場所をさすばあい

ココ・ソコ・アソコが場所をさすばあい、基本的にはつぎのように二つに分かれる。一つは、話し手と聞き手を「われわれ」のいる一つの場所としてとらえ、そこからの遠近によってココ・ソコ・アソコであらわすばあいであり、もう一つは話し手と聞き手を対立させてとらえ、ココ・ソコを自称・対称としてあらわすばあいである。

「場所」といっても、家、店、会社、ホテル、部屋のなか、防空壕などのようなくぎられた場所ばかりではなく、庭、道路、峠などのようなくぎられ

ない場所もあらわすことができる。また、村、町、部落、島などのようなひろい地域をもあらわすことができる。

3.1.1 話し手と聞き手がいる場所、およびそこからの遠近関係によって、ココ・ソコ・アソコが近称・中称・遠称になるばあい

話し手と聞き手がいる場所をココ、すこしはなれた場所をソコ、遠くはなれた場所をアソコであらわす。ココの用例が多い。

コー1 RCBホール・化粧室 和賀 佐知子が手伝い、タキシードに着換えている。～と、入口のあたりがざわめいてドアがあき「おう、ここだったんだな」と田所重喜が顔を出す。[砂の器]

コー2 戸田がやっと式台へ上がり、続いて上がった幾江がそそくさと応接間の扉を開く。「さ、ここでひと休みを…私はすぐに食事の支度を！」[人間革命]

コー3 料亭の二階座敷 階段口の襖がガラリ！と乱暴に開いて、泥酔した男が一人、ゆらりと仁王立ちになる——梅本である。階段を男衆が駆け上がって来て、「困りますよ。ここは貸切りですから」「うるせえッ、俺あ会田という社長に挨拶に来ただけだ」[女生きてます]

コー4 「いつもは、どこでお飲みになるんですか？」「たいがい、ガード下のオープン屋か、線路沿いの飲み屋だ」「たまには、ここへも来て下さいね」[忍ぶ川]

コー5 ダルマ船・船室（夜）～「ここなら少々声をあげても大丈夫だ。はずしてやれ」[宵待草]

コー6 二人はいつの間にか裏の出口に来ている。「あたい、ここから帰ろっつと」[時計は生きていた]

コー7 秘密の洞窟 暗闇の中にじーっとうずくまっている三人。～玄二の父が腰をかがめて入ってくる。「やっぱり、ここに居たか…よくここで遊んでたな玄二…ガキ大将で…」[宵待草]

コー8 「ここ、どこですか？」「知らないの？ 東京の下の、大きな地下道。抜けがらを残して、みんな生まれた所へ、帰る道なんだ。東京へはもどれません、一方通行。…」[やさしい日本人]

コー9 イサ子が徹男を案内してくる。一軒の家の前で立ちどまる。～「ここ、あたしんちだったのよ」それはこのあたりにありふれた、黒いトタン屋根の変哲もない家である。[津軽じょんがら節]

コー10 ××港の近く。鉄道から、海岸沿いの道の方へ三人が出てくる。無人の浜に一軒の番小屋がある。「あそこで待っていてくれ、船の交渉をしてくる」「ウン、三人じゃ目立つな。気をつけろよ」[宵待草]

- コー11 白昼。白い街路。道のかたわらに盲目の傷痍軍人がひとり坐ってものごいをしている。～「こんな所で、何をしている？」「皆様のお慈悲を頂いております。」「しかし、ここは誰も通らないだろう？」「あなた様がお通りになりました。」「私のために坐っていたのか？」「ここをお通りになる方のために坐っているのです。」「向こうへ行け。あっちの方が、もっと人が通る。」「私は、陛下のお許しを頂いて、ここに坐っております。」「陛下が、ここに坐れと言われたのか？」[戒厳令]
- コー12 線路の上を歩く少年。つまずいてころびそうになる。そこに兵隊バカが寝ていたのだ。「あ、ごめん」「(ムクッと起き上がって) 坊主！ どこへゆく？」「あっち… (と言って、ハッと思いかえして) ここを女の人通らなかつた？ 大きな荷物持って」[田圃に死す]
- コー13 衣川の川辺 ～岩城署の刑事、今西、吉村、土境の草むらに立ち、汗を拭いている。「ここに寝そべっていたんですね」「そうです」「何もせずに、ただここで寝そべっていたんですね」[砂の器]
- コー14 八幡神社の石段 笑いながら、降りて行く二人 地藏尊 来る二人。一雄 学校の方へ上がりかけた時、晴美、地藏尊を見つけその方へ行く 晴美、しゃがむ。それをみて一雄、「また、お願い？」「笑われてもいいの。私、おねがいしておく (一雄も一緒にかがみこむ)」「ここあがっていくと、小学校なんだ、そら屋根が見えるだろ、おれ、小学校は休んでばっかで、ほとんどいってないけど…行って見る」[狭山の黒い雨]
- コー15 ライトバンが峠につく。重さん、下りて、ヨイシヨイシと天突体操をはじめ。～「(ふと) そうだかあさん、ポチのうちこの辺じゃなかつた？」「うん、ゴルフ場のそばだけだ」「じゃ、ここから近いんでしょ。ひやかしに行ってみようよ」[女生きてます]
- コー16 「ああ…いい風だわ。やっと深川へ帰った気持」～「折角きたんじゃありませんか。もう少しいきましょうよ」哲郎の前を通りすぎ、胸を抱くようにしてしゃがむと、「(ぼつんと)…ここですか」「ああ」じっと目の前の水面をみつめたままの志乃。[忍ぶ川]
- コー17 「…ずっと町のですね、ここからどの位ありますか、一里ぐらいいあると思うんですが…そういうところまで汐が満ちた時はですね…」[水俣]
- コー18 「床の間のわたしのハンドバックにペンが入ってるわ。紙は、その机の上に便箋があるじゃない」重さん、うなり声をあげて立ち上り、ごそごそして、パッとスタンドをつけた。[女生きてます]
- コー19 広縁に立ち、障子を開け放つ。芦の湖を見渡す広大な庭に逸品の石が二つ並んでいる。「鞍馬石は、そのつつじの寄せ植えの間に置きましたよ」[華麗な

る一族]

- コー20 老番士が一人、周囲を憚かって、そっと腕を招く。「？」腕、その方を見る。
「希四郎さまをお呼び下され…そこに居ります故…」老番士、傍らの庭木の蔭を指差す。[腕という女]
- コー21 一輝、ひとり立つ。一輝が今入ってきた扉から、背広姿の壮年の男が一人現れ、一輝の背後を通りホールを抜けて正面の階段を登ってゆく。途中で止って、北を振り返る。北は別の方向を見ている。さきほどの行員が現れる。男、階段を登ってゆく。「(やや態度を改め)失礼しました。どうぞ、こちらへ(案内する)」「(従いてゆきながら)今、その階段を登って行ったのは、確か東京憲兵隊の岩佐君だと思いましたが…。」[戒厳令]
- コー22 その間、志乃は所在なげにうろうろ立ったままである。戻りかけた母にぶつかり、二人すまなそうに「あ…」と声をあげ、顔を見合わず。志乃、困ってしまつて、「あの、何かやらせて下さい…」「じゃ、その漬物桶から…」「はい」と、近づき、かいがいしく桶の石をとる。[忍ぶ川]

次の例のアソコは遠称としての用法か、他称としての用法か正確には判断できない用例もあるが、多分、話し手と聞き手は近くにいるものとおもわれ、遠称としてつかわれているのだろう。区画されていない場所をさしている。

- コー23 「明日逢えるかい」「明日?」「逢おう」「三時の汽車で発つわ」「正午…もう一度逢おう」「駄目よ」中原、視線を街の方へめぐらして、「あそこに見えるあの旅館に、十二時に…必ず行く」[約束]
- コー24 「いいえ、陛下は、私がここに坐っている事を、御存知なのです。」「そうか、それじゃお前も、陛下が(ステッキで指し)あそこに居られる事を知っているのだな?」「陛下が御存知なのです、私が、ここにこうして坐っている事を…。」[戒厳令]
- コー25 いい子だから、あそこにある空気入れを持ってきてちょうだい。[田圃に死す]
- コー26 ほら、あそこに居るのがぼくの抜けがら、あんたのもいるじゃありませんか… [やさしい日本人]
- コー27 あれ、兄キ、あそこん所に立っているべっぴん、あれ誰? [男はつらいよ]

次の例はすべてソコであらわされているが、みることでできない場所をさして、特殊なものとおもわれる。不特定の場所をあらわしている。慣用

的な表現か。話し手や聞き手のいる場所からそう遠くないところをいみしている。

コー28 金沢、入って来て、「一寸そこを通りかかったんでな、どうだい？」[女生きてます]

コー29 「送ってくぜ」「いいの、すぐそこなの」[八月の濡れた砂]

コー30 「お近くですの？」「学生寮だ、そこの横町を折れた」「ああ、つきあたりの」[忍ぶ川]

コー31 「昨夜おいちゃんここに電話したらよ、今日葬式だってえじゃないか、俺、岡山でバイやってたのよ、すぐそこだろ、だからとるもとり敢えずとんで来たのよ。」[男はつらいよ]

コー32 「体には気をつけとくれよ」「母ちゃん、目をなおしてね」「じゃ、いくまいか」「うん」「(たまらず) そこまで送ってこう」[狭山の黒い雨]

コー33 「健が家にじっとしてる子かよ。鞆を投げ出したら最後、糸の切れた凧さ。そこらに影も形も見えやしねえ。」[時計は生きていた]

3.1.2 話し手と聞き手を対立させ、ココ・ソコ・アソコが自称・対称・他称になるばあい

話し手のいる場所をココ、聞き手のいる場所、または聞き手に近い場所をソコであらわす。

コー34 三雲が電話に出ている、ソファーに鉄平がいる。「三雲です。実は今、ここにご息の鉄平君がみえられているのですが…」[華麗なる一族]

コー35 栄治、逃げて来て、生垣をとびこえてはいる。防空壕から老婆が声をかける。「ここへ隠れなさい」「え？」「わしひとりじゃ、あと一人ぐらいはいれる」[時計は生きていた]

コー36 「どんなことを話していたかは、そことここの間だろう」「それが…有線のレコードをかけておりましたし、～」[砂の器]

コー37 「さ、どうぞ、どうぞこちらへ」「此処でいいわ」「は？」蛍子はスリッパを履いて上ると、ロビーのソファーに腰をおろした。[約束]

コー38 やって来た栗川が顔を出す。「おう、栗川君、ここへ」山平が席をゆずり、栗川が戸田の隣に坐る。[人間革命]

コー39 覗き窓から12号房をうかがう曾我看守、～「期限は来てるんだぜ、そこでもう二度といざごさは起こしませんと這いつくばってお願いしろ。出してやらん

- でもない…」[女囚 701 号さそり]
- コー40 田所が棒立ちに立っている。目の前の車椅子の中に骨と皮のような老人が膝に毛布をかけ、じっとうずくまるようにしている。「田所さんじゃな、(意外にしっかりした声で) そこへかけなさい」[日本沈没]
- コー41 海の家「西の家」 オートバイ、裏口に来て止まる。「(降りながら) 兄貴の出店なんだ、今なら誰もいない」鍵でドアを開け、早苗の中に入れる。オートバイに戻り、「いいからそこで待ってろ。何か着るもんもってきてやる」[八月の濡れた砂]
- コー42 「あんた、おい！ そこの女 髪ふり乱した中年の女が物干しをにらみつける。「(見おろして) 私？」「汚い水がはねてるじゃないか、気を付けな」[女生きてます]
- コー43 真鶴道路——道端の公衆電話ボックスの中 玲子、全く血の気の引いた顔で電話をかけている。～「今日出発だから、昨日下田へ帰っていたんです！ 朝の七時に下田を出ただけけど！ ここまで来たなら！」[日本沈没]
- コー44 「そこじゃ話になりません、さ、遠慮なく」無造作に机を離れ、来客のために座布団をすすめて座に着く。中年の男、やっと遠慮気味に中へ入る。[人間革命]

3.1.3 地域をさすばあい

地域をさすばあいは、ほとんどが話し手と聞き手が一緒にいる場面で行われている。大きく区画された地域をあらわしている。

話し手と聞き手がいる地域をココ、はなれた地域をアソコであらわす。

- コー45 「～しかし人間はどんなに貧しくても学問だけは忘れてはいけません。いや、貧乏をなくすためにこそ学問は必要なのです。ここの部落を良くするためにも、どうしても、うんと学問の出来る人が出る必要があります。～」[狭山の黒い雨]
- コー46 「帰るのは、来月？十一月の初めごろ、ここ発とうと思うさ」「これからあっち行くんでしょう、南の方に」「与論島の方へ行ってみようかと思って、～」[極私的エロス]
- コー47 「九州へでもいきますか、わたしの生まれ故郷へ」「どこへ行っても同じだ」「あっちは暖かいから、それだけましですよ」「ここは俺の生まれたところだ」[わが道]
- コー48 「～なぜここに、水俣に来たろうかと思うですな。なぜ、来たろうかと…」[水俣]

- コー49 「その恨みの原因はですよ、ここに駐在されている間に起きたものだと思います。～」「わざわざ遠くからお出て御苦労なことですけど…ここの村であの人に恨みを持つ者なぞは…」[砂の器]
- コー50 「東北新幹線は本格的に着工されて、×年後には完成ですよ。そうしたら、青森までたったの五時間半、それに東北縦貫道路が開通すると、ここまで半日で来られますよ。半日で！」[津軽じょんがら節]
- コー51 「年の頃三十一寸すぎ、眼元に減法色気があって、小学校三年くれえの子供がいる女の人の人よ、最近ここへ来たらしいが、知らねえか」[男はつらいよ]
- コー52 駅前広場 患者さん及びつきそいの巡礼者一列に並び深々と頭を垂れる。「(旅の果てに、ある感慨をもって)…大阪駅での皆さんがたの、熱烈なる歓迎に迎えられまして、わたしはもう胸が一杯でございます。患者の皆さんをお連れするのに、随分なためらいがございましたけれども、ここに、みんなを連れてきて、よかった！ と、全国の皆さんがたと—支援の皆さんがたと—患者と合わせるだけで、十分であったような気がして、なりません。…」[水俣]
- コー53 「あの兄は風来坊なんです、旅鴉」「そう…そうでしたの…じゃ懐かしいのね、妹さんのいらっしゃる此処が」「とんでもねえ、こんな町のどこが、古くせせばっかりで気のきいた飲み屋がある訳でなし、若い女はいねえし…?!」[男はつらいよ]
- コー54 「どうも、口が固いですな」「貝みたいでね」「こんな事珍しいですね。警察には協力的な地域なんですがね」「しきりに、よそ者、よそ者という声がきこえますな。それに、あすこの(アゴをしゃくる)部落の者が犯人だっていう噂が流れてるの、聞かれましたか」[狭山の黒い雨]

3.1.4 いれものをさすばあい

次の用例は話し手もっているいれものをあらわしているが、ココであらわされると場所性をもったものになる。区画された場所をあらわす。

- コー55 「石川君ここにツバをいれてくれないか」「…」「なんでもないんだ、ちょっと検査するだけだよ」「はい」一雄、さかずきにツバを入れる。[狭山の黒い雨]

次の用例も場所性をもったものである。ポケットなども似たようなものとして扱っていいだろう。

- コー56 「花婿のお母さまが、これをお忘れになっては困りますわ」白扇を出す。

「(帯をみて) …あら、ここに差したとと思いましたのに…」[華麗なる一族]

3.2 箇所をさすばあい

ものの部分をさすばあい、「この部分」「その部分」といわないで、ココ・ソコ・アソコと場所的にとらえていうことがある。これを箇所という。

ものまたはひろがりのある面の部分をさすばあい、そのものの性質によってあらわれ方にバリエーションがある。面をもったものの部分、たとえば新聞に出ている記事などのようなものは箇所といっても、面的なひろがり-場所をもつ。線的なひろがりをもつものの部分、たとえば、ひものようなもののある部分-箇所は点としてあらわれる。たとえば、面的なひろがりをもつ本は、本の形をしたものと、書かれた内容とでなりたっている。本のあるページをひらき、そのある部分をさしてココといったばあい、その場所のある箇所をさしているのか、そこに書かれた内容をさしているのかによって、ココのあらわすいみがちがってくる。

ココ・ソコ・アソコがものの部分をあらわすとき、そのものは手でもつことができるような小さなものも、人間の体も、地図のような面のひろがりをもつものもある。その際、指さしなどの身ぶりをともなってつかわれることがある。

話しの場は、話し手と聞き手が近くにいる場面にかぎられる。

○場所の反映物をさす [ココ、ソコ]

コー57 シゲ、新聞ひろげている。「おい、これ見ろよ、おもしろいぜ」「何だよ」「やさしい日本人なんて知らないけどよ、やさしいお母さんならここに出てるぜ、読んでやろうか。身上相談」[やさしい日本人]

コー58 「今、しなよ、いいんだよ、電話代ぐらい、さァ」「そう…じゃお言葉に甘えて」と、立上がり、電話の傍にゆく。「番号そこに書いてあるよ、こないだ博さんに聞いたの」 さくら、メモを見ながらダイヤルを回し始める。[男はつらいよ]

コー59 反対側の隅に女子高校生が二人、数学の教科書を開いてボソボソと話合っている。「やっぱり解けんわ。明日の試験どうしよう」「どこがいけんのやろなあ」～またぼやき乍ら解き始める。少女、近寄って問題を覗き込む。「そこが

違うんよ」 女子高生二人、吃驚して見る。[旅の重さ]

○ものの部分をさす [ココ, ソコ]

話し手もっているものの部分、または話し手や聞き手の近くにあるものの部分をココであらわし、聞き手のもっているものの部分をソコであらわす。コー60の例は、おなじものをコレともいっている例である。

コー60 「お兄ちゃん、お兄ちゃんがシャッターおして上げなさいよ」「あ、そうだな、俺が一番遠縁だったな よし」と急いで修の傍にゆく。～「(カメラを差出して)判りますか、ここ押すだけでいいですから」「ああ、これね、押すだけでいいんですね」[男はつらいよ]

コー61 スライドが糸魚川から静岡に到るフォッサ・マグナになり、一同の眼がそれに集中する。「日本に変動が起きるばあい、一番先に裂けるかずれるかはここではないか…」[日本沈没]

コー62 D1本部からの中田の声。「高度千に下げろ」「(テレビを操作し)映りますか?」 中田他がテレビを見ている。だが、画面には黒い海だけしか写っていない。「幸長、まだ大阪じゃないじゃないか?」「いや、ここが大阪だ」[日本沈没]

コー63 「本当はここの、教科書の出たところの近くの川ではないのか。俺には何でもわかるのだよ」と、地図をみせる。[狭山の黒い雨]

コー64 「それじゃ、その溝かも知れんな。石川君ここの溝を書いてみてくれないか。おそらくここにあると思うな」「はい」一雄、あらかじめうすく線の引いてある地図をなぞるようにして書く。[狭山の黒い雨]

コー65 東京、三宅坂の陸軍省を中心とした地図に西田が兵の配置を鉛筆で書き入れる。「～議事堂周辺、こことここで検問しております。混乱はありませんよ。」[戒厳令]

○話し手、聞き手のふれている体の部分をさす [ココ, ソコ]

話し手がふれているものの部分をココ、聞き手がふれているものの部分をソコであらわす。コー70、71の例は体のもち主ではなく、ふれている人によって、ココになったり、ソコになったりするものである。コー66、67の用例は話し手がさしているのは自分の体の部分であるが、ココであらわしているのは具体的な自分の頭ではなくて、抽象的な頭一般をあらかわして

いるのである。また、コー68, 69の用例は話しの場面では直接的な用法として自分の体をさしているが、実は、過去におこった話しの場を再現してみせているのであって、その時の実際の体のもち主とはちがっているばあいもある。

- コー66 「あの娘、ちょっとここ、オカシイのところがうか？」と頭を叩く。[宵待草]
コー67 「(ニンマリ) さすがはおめえさん、わしらとは頭(ココ)が違うて…」[女囚701号さそり]
コー68 「～、刺し殺してくれっていうから、あんたどこ刺すね、ここでも刺すかね、～」[極私的エロス]
コー69 「何よあのクソババア、あれ殴りきらんよ、せいぜいこれくらいだがね」「ここかきむしってくれちゃってやったよ、爪が折れてから、ここ、もうわじわじしてよ」「かきむしった?」「かきむしってくれた、だいたい顔かきむしってやろうと思ったけどよ、洋服ここバシーって、こげんしてから、ボタンなんかポロッととれて」[極私的エロス]
コー70 少女は蒼白な顔で沖を見ていた。政子、少女の心の底を覗いたように凝視。少女の耳のうしろにひっかき傷が血を滲ませている。政子「あ…ここ…血が…」指先で傷に触れようとする。[旅の重さ]
コー71 少女、木村の頭髪を拭き始める。「ええよ、そこは…ええがな、髪が薄うなる」[旅の重さ]

3.3 場所の反映物をさすばあい

物理的存在としてはものであるが、そこに反映されているものが場所をあらわすばあいがある。さしかたは、ものをあらわすばあいとおなじである。コー59, 61, 62, 63, 64, 73の用例は、いずれも地図、言語作品などのなかに反映された場所をさすものである。また、次のような、文章そのものが場所をあらわしている用例もある。

- コー72 「じゃ、世界のどこかで…スイスのアドレスはここですから連絡して下さい。」[日本沈没]
コー73 ～数年前の写真、珍らしく、胎児性の子供が一堂に会している。「胎児性の子供は全部並んどるたい、ここに…」「ああ、ほんとのこと」[水俣]

3.4 集団をさすばあい

会社や店などは建物という「もの」と空間をもつ「場所」とからなる物理的存在である。しかし、ある一定の目的をもった人の集合体であるという側面をもっている。いれものに対する中身、内容である。それをここでは一応「集団」とよんでおく。

ココが集団をさすばあい、話しの方は話し手と聞き手が近くにいるばあいにかぎられていた。話し手と聞き手がはなれているばあいに、相手の属する集団をソコでいいあらわすと、集団ではなく、場所をさしめすようになるのかもしれない。

話し手や聞き手の属する集団、または話し手や聞き手が一緒にいる場所にある集団をココであらわす。場所的なニュアンスをもっている。コー74の例は、松田国太郎一座という旅芸人の団体である。固定した建物をもたない中身だけの集合体である。

コー74 「あんなに仰山の買出しが四百円って筈はないわ。自分のお金出して気に入れようと思ったのかも知らんけど、つまらん気イ使わんで、お金は大事に持ってたほうがええよ。もう此処で使って貰えるんだもの」[旅の重さ]

コー75 巨大な銀行の建物の前。北一輝が一人立っている。～「何か？…」「こちらの御主人にお目にかかりたい。」「主人…と申しますと…？」「御主人。三井財閥の御当主。」「私は、ここの御主人にお会いしたいのですが、御主人がお会いになると言ったのですね…？」[戒厳令]

コー76 タナカ・モータースの中 主任，二人の男相手にどなっている。「だからねえ、何度言ったらわかるんですか！ 私はここの責任者だ、ここで働いてる者のことは私が責任を持ってるんだ。」[やさしい日本人]

コー77 D1本部 小野寺が大阪から帰って来て顔を出している。～「僕はこれからなにをすれば…いや、ここまでくれば僕の仕事はもう終わったと思いますが」「ここの本部は退避実行委員会の下部機構に組入れられると思う、勿論、君も一緒にね」[日本沈没]

コー78 芸能社 ～「～物価の値上りを計算しますと、百万貯めるのに五年かかるんですね。ですから、こういう時代には短期決戦で行くよりよい方法はないという結論に達しましたの。私、二年ここで働いて三年目に相手を探して結婚することに決めました。～」[女生きてます]

- コー79 女子寮の一室～「ねえ、あんたたち、青春は短かいんだ。電気会社なんか止めちゃってさ、あたみみたいに、外で稼いだら？」「そんなにいい？キャパレのホステス？」「ここの生活にくらべたら天国ね、そうだ。いい人を紹介するわ」[遊び]
- コー80 湖南亭 巨大な丘の中腹で、茶室ふうになっている。～「君達は何がいい？僕はさっき済んだとこだが」「私、お腹ペコペコ、英良さん、何になさる」「何がいいかな」「ここのお得意は、一応バーベキューと言うことになっているんだがね」[砂の器]
- コー81 とらや ～貴子が入って来て、「ごめんなさい、お取込みのとこを…」「いいえ」「あの、お団子を一箱」「はいはい」「ここの草団子、とってもおいしいんですってね」[男はつらいよ]

3.5 場面をさすばあい

事件などがなりたつ状況そのものではなく、それらがなりたつために必要な場面をココがあらわしているばあいがある。

話しの場合は、用例では話し手と聞き手が近くにいるばあいにかざられていたが、互いのすがたがみえない場面でもいえるだろう。

- コー82 元の取調べ室 「ああ！関口さん！」一雄すがりつく。「関口さんにまかしここは…」と刑事ら頷きあって消える。関口と一雄の二人。[狭山の黒い雨]
- コー83 “告発”の指揮者の提案の声——。「大会に於て、大会冒頭において彼らが応ずるか、どうか分かりません。われわれは、大会に要求します、けれども、その前に、われわれはここで、全員です、ここで黙禱を捧げたいと思います。(間)…黙禱！」[水俣]
- コー84 「あなたは、出稼ぎに出ることに、賛成だったんですか、反対だったんですか」「なんぼ苦勞しましても、満州のあの弾の中で、別れ別れの生活をしないで、そしてここへ来まして、年をとってから別れ別れの生活をするというの、私、反対でした。」[わが道]

次の用例は時間的な要素も入っている。一定の順序にしたがって展開されているもの、たとえば映画の画面にうつったようなもののばあい、時間的な要素が入っている。

- コー85 電光時計の針が回り始める。端末器を叩く音や電子プリンターの音。プロッ

ク・スクリーンに日本列島が青い像で浮かび上がり、黄色、オレンジ、赤の光点が明滅しながら現われ、～「ストップ…ここからだ。時間は？」「三〇二秒フラット！」「幸長君、ここから先はVTRの他に象眼写真だ、二秒間隔で…タイム・スケールを半分におとそう、一秒が十二時間だ」[日本沈没]

3.6 時間をさすばあい

ココと時間をあらかず数詞とがくみあわさって時間をさすばあいがある。話しの場は話し手と聞き手が近くにいる場面であつかわれていたが、はなれている場面でもあつかわれるとおもわれる。

○話しの時点を基準とした時間（現在から未来にかけて）

コー86 「韓国、台湾、中国には早目の通告が、…特に韓国はなんらかの被害をかなりこうむるでしょうから、国際信義としても、ここ一、二週間のうちには」「(一同を見まわして)では、…内外に対する公表は、今日から二週間後にします」[日本沈没]

コー87 「今朝ほどの外国のニュースでも聞かれた通り、きわめて近い将来日本列島を中心に大きな地殻変動がおり、日本国土はそのため、壊滅的な打撃と破壊を受けるだろうということが、我国の科学者及び政府機関の調査により確実になりました…調査機関の予測に依りますと、この変動はここ一年以内の間に起こり、その変動の結果、地震その他によって国土全域が破壊されるばかりでなく、日本はそのほぼ全域が海中に没し去るということによって…」[日本沈没]

○話しの時点を基準とした時間（現在から過去にさかのぼって）

コー88 「オジさん…手紙にも書いたでしょ。あたし、ここ三年ばかりは国一さんに逢っていないのよ」[津軽じょんがら節]

コー89 「え、寿司屋が？」「君には事業の面で世話になり、そのうえいつもご馳走にばかり…だから今日は、われわれ一同で招待ということになってね」「ほう、そうか、そいつは悪くないね、寿司なんてのは、ここ何年間も、ハハハ…」[人間革命]

コー90 「ここ数カ月の測地衛星と観測船による調査を総合すると、極東の大陸棚の一部、弧状列島付近において、いまだかつて人類の経験しなかったような地殻変動の起きる可能性が高まりつつある。その変動は…」[日本沈没]

4 コチラ・ソチラ・アチラ(コッチ・ソッチ・アッチ)がさすもの

コチラ・ソチラ・アチラは場所、ひと、集団、もの、ものごと、方向、側をさす。このうち、場所をさす用例が一番多かったが、方向や側をさすことができるのはこの類だけである。

コレ…がものをさすばあいや、ココ…が場所をさすばあいとくらべて、コチラ…はものであっても、場所であっても、対立する一方であるというニュアンスが含まれているようにおもわれる。

用例には、コチラは直接的な用法だけで、ソチラ、アチラは文脈的な用法も多くみられた。

話しの場は話し手と聞き手が近くにいるばあいだけにかぎらず、姿がみえないところでもつかわれる。

方向や側をさすときには身ぶりによる何らかの表示があるが、場所をさすときには身ぶりなどをともなわないものが多い。

コチラとコッチは言い方のていねいさによるちがいとみて、ここではおなじにあつかった。以下、話しことばでよくつかわれているコッチのほうで説明する。

4.1 場所をさすばあい

コッチ・ソッチ・アッチが場所をさすばあい、ココ・ソコ・アソコが場所をさすばあいと同様、話し手、聞き手からの距離の遠近によってあらわすばあいと、話し手と聞き手を対立させてとらえコッチ・ソッチを自称・対称としてあらわすばあいの二つがある。

場所はくぎられた場所もくぎられないひろい場所もさすことができる。

コッチ、ソッチ…でしめされる場所は、部屋、家、会社、寺、船、自動車の座席、道路、町、島、線路…などである。

4.1.1 話し手、聞き手がいる場所、およびそこからの遠近関係によって、コッチ・ソッチ・アッチが近称・中称・遠称になるばあい

話し手と聞き手がいる場所をコッチ、それよりすこしはなれたところをア

ッチであらわす。中称としてのソッチの用例はなかった。話し手が指さす場所をコッチやアッチでいうこともある。

- チー1 ドアを開けて入って来る女中。つづく少年と少女。「こちらでございます。すぐお食事をお持ちしますから、どうぞごゆっくり」と去る。[遊び]
- チー2 機械がフル回転している工場の中。～梅太郎、慌てた様子で駆け込んで来る。「博さん、あんたのお父さんがね、今とらやさんに来てるよ」「え？親父がですか」「うん、旅の途中らしいんだけどね、立派な挨拶されて、俺汗かいちゃったよ。こっちはいいからさ、行ってあげなよ」[男はつらいよ]
- チー3 鉄平の家 暗い中に三雲が佇んで、鉄平を偲んでいるが、人の気配にふり向く。～「あちらに供養膳をご用意しておりますので、どうぞ」「いや、私もそろそろ、帰京致さねばならないのですが、なんとなくこちらへ足が向いてしまってます」[華麗なる一族]
- チー4 或る部屋の前行員立止まり、扉を開いて、北を待つ。「こちらです。ここでお待ちいただくように、との事でした。」一輝、部屋に入る。簡素な応接間である。[戒厳令]
- チー5 「今朝、急に千葉の親セキの家へ行こうっていいだして…それで家を出たんです。でも…千葉に親セキなんてないんです…。それで…途中で降りて、お酒を飲んで色々歩いたんですが、最後にこちらのお宅へ…」[戒厳令]
- チー6 「何年振りだべ、玄二」「ウン、もう十年ぐらいいなるかな」「ちょっと手紙でもよこせば、トリの一羽もつおして待ってたものを」「仕事の都合で、急にこっちへまわったもんでな、ミヤゲも買えなんだ」[宵待草]
- チー7 「じゃあ、今日、こちらへお招きあずかったのは、そのお話ですか」「その点については、こんなところでもなんですし、是非共さしでお話させて戴き度いとおもってますね」大介、綿貫をうながすと、床から座敷へ入る。[華麗なる一族]
- チー8 「机置くところ、きまりましたか？」「やっぱり、こっちにする」「窓ぎわでいいんですね」[妹]
- チー9 「こんな所で、何をしている？」「皆様のお慈悲を頂いております。」「しかし、ここは誰も通らないだろう？」…「向こうへ行け。あっちの方が、もっと人が通る。」「[戒厳令]

チー8、9の用例は、場所としてさすばあいには多分指さしがあるだろう。

4.1.2 話し手と聞き手を対立させ、コッチ・ソッチ・アッチが自称・対称・他称になるばあい

話し手のいる場所をコッチ、聞き手のいる場所、または聞き手に近い場所をソッチであらわす。コッチの用例のばあいは、話し手の存在場所をあきらかにして聞き手に自分の方にくることをうながす用例が多い。指さしなどの身ぶりはなくてもよい。チー15、16は互いに姿がみえない場所での会話である。

- チー10 「おい坊主、中へ入れ!」「いやだ」～「(ふいに、きびしく怒鳴る) そんなところへ突っ立っていると、人目につくじゃないか! こっちへおいで、ぐずぐずしないで」[田園に死す]
- チー11 「こっちだよ、こっち 二階の八畳だ!」 戸田が階段の踊場から叫んでいる。[人間革命]
- チー12 竜造、ほっとしたような表情で、「さあ博さん、こっちへおいでよ」 博、座敷に上ると両手をつく。[男はつらいよ]
- チー13 小野寺、波長をレンジ一杯にし、VLFで巽丸の結城を呼ぶ。「今、そちらの海水の異状震動を感じたか?」[日本沈没]
- チー14 明るくなった窓の外に、早苗が立っている。清、あわてて起き上る。「そっちに坐っていい?」「あ? ああ」 早苗、助手席に坐る。[八月の濡れた砂]
- チー15 阪神特殊鋼・専務室 「申しわけありません。しかし電話では何ですから、今すぐそちらへお伺い致します」 阪神銀行・頭取室 「来ても無駄だ。融資会議の決定に再考の余地はない」 大介、電話を切り、ふと壁の写真を見上げる。[華麗なる一族]
- チー16 「(電話器を取上げる) ああ、邦枝君か。三村君から山本総理へ伝えてくれ… 皇室は直ちにスイスへ出発、政府機関はマイクロネシアのヤップ島へ退避開始だ…そう、そう、詳しいことはそっちへ行って話すから…」[日本沈没]

次の用例のアッチでしめされる場所は限定されていない。話し手、聞き手のいる場所以外はどこでもアッチでしめされる。他称としてのアッチとおもわれる。

アソコが場所をさすばあいは、ふつうは指さしなどの身ぶりをともなうが、ここでの用法は、限定されていない場所なので、指さしはない。

- チー17 「うちの子供の教育に悪いからね、(子供に) あっち行きな」 子供、ベルを鳴らして走りすぎる。[女生きてます]

チー18 クスッと笑う由美。「(にらみ) あっち行ってる。(清に) あいつ誰とでも寝るんだ、どうだお前」「(由美を見る) …」[八月の濡れた砂]

4.1.3 地域をさすばあい

地域をさすばあいは、ほとんどが話し手と聞き手が一緒にいる場面であって、コッチであらわされている。

チー19 「まァ…いつぞやは」「はい…あの…こちらに…お住いでしたか」「ええ、ついこないだから…」[男はつらいよ]

チー20 「…そうですね、もう水俣へ帰れば、その、伝染病だと、こりゃもうそうだということになって、われわれ六軒(註、最も初期の患者さんたち)が白浜(の避病院)からこちらに来るとですよ…地元にもどってくると、バスから降りると…」[水俣]

チー21 「しかし、こっちの、ソノオ、出水市内の世論がひどかですよ。現在その世論に負けて、ソノオ、ふたり、三人、四人ぐらいでしょうかね、認定を受けずに死んだ人は…」[水俣]

チー22 「お晩デス、実は、さっき×町の本署から電話があつてな、今日、××銀行さ強盗が入つてさ、若い男二人と女まで一人入つとつてな——」「…」「それがどうも、こっちの方さ逃げ込んだらしいんだ。ピストル持つてるがら、何するかわかんね、×町でも一人殺したらしいな…」[宵待草]

チー23 「零、あんた寒くないの、たいしたもんだねえ。あんたもきたえられてんね」「うちもこっち来た時、ものすごく寒かったんだよあんた、急に寒くなつてさ」[極私的エロス]

次の例は話し手の行く先をあらわしている。特定の場所にむかっていく途中である。多くはコッチであらわされる。この用法のばあい、身ぶりなどの表示はとりたててないが、話し手が歩くことで表示されているといえる。

チー24 「どうぞ、こちらへ(案内する)。」「(再び歩き始め)どうぞ、こちらです。」長い廊下である。行員と一輝、ゆっくり歩いている。[戒厳令]

チー25 哲郎は、～右手の建物へむかい気負って大股にあるいていく。志乃、その後を追いかけて、「あの、ここは、弟の仕事場なんです」～「箒をつくってますの、こちらへどうぞ」志乃についてコートを脱ぎながら、神殿の階段をのぼる哲郎。[忍ぶ川]

- チー26 「いらっしやいませ。御休憩ですか」「はあ…」「さ、どうぞ。どうぞこちらへ」「此処でいいわ」[約束]
- チー27 「ちょっと、あっちへ棺を運んできますから」「なぜでございますか」～「中をみせてあげますから、ちょっと借りたいんです」[わが道]

次は文学作品の用例カードであるが、話し手の行く先をあらわしている。

- チー28 「お前にちょっと話があるのよ」と言った。「お茶をいれてあげるから、あっちへ来なさい」冷たい廊下を、ナイロンのうすい靴下をはいた足の爪先を反らしながら、理枝は母のあとについて、茶の間にはいった。[四十八歳の抵抗]

4.2 ひとをさすばあい

コッチ・ソッチ・アッチがひとをさすばあいは一、二、三人称すべてをさすことができる。(ただし、用例カードには直接的な用法のアッチの使用例はなかった。)話し手と聞き手が互いに姿がみえない場所にいるばあい、コッチは話し手自身のことしかあらわせないが、話し手と聞き手が近くにいる、互いに相手の姿がみえる場所にいるばあいは、コッチは話し手も聞き手も第三者もあらわすことができる。三人称をさすばあい、指さしなどの身ぶりをもなうこともある。

○話し手自身をさす [コッチ]

- チー29 「つきあいをお断りしたいのはこちらですよ。どうぞどうぞ警察にだろろうが郵便局だろろうが訴えて下さい、はい」[女生きてます]
- チー30 「どうもすみません遅くなりまして、こちらからお詫びの電話をしようと思いいながら」[男はつらいよ]
- チー31 「おい、こっちは毎日ジャリを積んでダンプをぶっとばしてるんだ、酒でも飲まなきゃどうしようもねえや。」[遊び]
- チー32 「さあもう帰ってくれ、こっちは忙しいんだ。帰れよ！帰れよ！」二人を追い出しにかかる。[やさしい日本人]
- チー33 「知ってることは全部話す。むろんこちらからもデータは全部出すよ。兄貴夫婦の家がすぐ近くにあるんだ」[妹]
- チー34 「オヤジだって東京でデタラメやってんだ。こっちゃ生き死にのモンダイだからな、…」[わが道]

チー35 「反対に、こちとらは、何もしゃべくったり、書いたりしねえかわりに、やる事をやるだけだ。」[宵待草]

チー36 「よくありますね、そう言うことは、こちとらカラケットで腹空ってるから魚焼くにおいが垣根ごしにブーンときて唾が出たりしてね」[男はつらいよ]

○聞き手をさす [ソッチ]

チー37 「もしもし、俺だ、今着いた。そっちはどうなっている…え、夜まで？そりゃないぜ」[約束]

チー38 「あなた誰？ 名前は？ 何言ってんだよ、おっことしたのはそっちじゃないか」[八月の濡れた砂]

チー39 ブツクサ言う食堂の主人に大声で凄む。「おかしいなそっちじゃねえのか、え？ 町内一軒のこらず、お陰で衛生がよくなって助かります、蠅や蚊がいなくなつて助かります。～」[女生きてます]

チー40 「下手をすると、週刊誌のスキヤングルにもなりかねないことを、あえてなさるのは、何かそちらのご家族は細川家とのご縁組にご不満でもお持ちなんですか」[華麗なる一族]

○三人称をさす [コッチ、ソッチ]

チー41 「じゃ、俺は、こっちだ」と女Bの尻を叩きながら出てゆくが～ [宵待草]

チー42 別の女中が二十五位の喪服の女を連れて来て、「あのう、こちら昨日お亡くなりになった方の奥様ですが…」[宵待草]

チー43 「あら、高校生は駄目よ」「高校生じゃねえよ、もう」「そちら、清くんのこと」[八月の濡れた砂]

4.3 集団をさすばあい

コッチが話し手の属する集団、あるいは聞き手をも含めた集団をさすばあい、話し手と聞き手が近くにいる場面でも、互いに姿がみえない場所にいる場面でもつかわれていた。用例カードでは聞き手の属する集団をさすソッチの用例はなかった。指さしなどの身ぶりはともなわない。

○話し手が属する集団 [コッチ]

チー44 こちら非常災害対策本部 長官をお願いします。[日本沈没]

- チー45 どちらへおかけですか？ こちら104ですよ。[やさしい日本人]
- チー46 部数？ それは紙の問題もあるから、こちらで検討させていただいたうえで、
～ [人間革命]
- チー47 「常務のポストは用意してくれましたか？」「こっちはいつでもいいよ」[華麗なる一族]
- チー48 こちら富士観測所、一時二十七分、八合目付近より噴火を始めました。[日本沈没]
- チー49 転げ出る三人を四方から押し包むように近づく黒木たち。～「では、その娘をこっちに渡してもらおう、そうすれば、さっきの敵前逃亡も水に流そう」[宵待草]

○話し手、聞き手の属する集団 [コッチ]

- チー50 こちらでは極秘にしているも、いずれ海外からニュースが流れてきて、国内は騒然となる。[日本沈没]

4.4 ものをさすばあい

コッチ、ソッチがものをさすばあいは、コレ、ソレがものをさすばあいと同じく、物理的に存在する具体的なものをさししめず。ただし、コレ、ソレでさしうるものをすべてコッチ、ソッチでさせるわけではない。さすもののほかに同類のものがあって、それとの比較を言外に含んだもののさし方のばあいにコッチ、ソッチをつかうようである。ふつうは、指さし、あるいは、そのものをもちあげるなどの身ぶりをともなってつかわれる。

話しの場は、話し手と聞き手が近くにおいて互いに姿がみえる場所にいるときにかざられる。

○話し手や聞き手もっているか、ふれているもの [コッチ、ソッチ]

- チー51 「(プレスシートを二枚取出し)これが朝霧、こっちが男の街、大体の筋書が出ていますがね」[砂の器]
- チー52 「(書類を差し出し)これが上大崎時代…こっちが現在の原価計算です」[人間革命]
- チー53 少年、将棋盤をにらんで考えこんでいる。「どうすすめたらいいかわからなくなってしまった」「王が動けばいいんだよ」「角道だもの」「左だよ。そっち

は右だ。おまえの右がおれの左になってるんだ」「あ、これだな」少年、一駒、動かす。[田園に死す]

○話し手の近くにあるもの [コッチ]

チー54 「～、今のとこ、準備完了ね、子供が出始めたらお湯どんどんわかし始めて」「また、さらにわかすのね」「こっちの方に、トライの方にいるからね、それもあまり急がなくてもいいよ、湯わかし器あるでしょ、あのお湯で」[極私的エロス]

チー55 スキ焼き鍋が二つグツグツ湯気を上げている。～「みんな遠慮なく。おれはこっちだよこっち…幾江、コップにしてくれ」コップを受け取ると、自分でゴボゴボ酒を注ぎ、～[人間革命]

次の用例はひろい面積をもつものである。場所的である。

チー56 「片岡君、(プラスチック・スクリーンを指さし)こっちにもうちょっと広い地域、西太平洋から東南アジア全域のものが写せるか」片岡がスイッチをいれ、プラスチック・スクリーンに、日本列島を中心に、小笠原、沖縄、台湾、フィリピン、朝鮮半島、沿海州の一部までのものが写る。[日本沈没]

4.5 ものごとをさすばあい

コッチ、アッチがものごとをさすばあい、話しの方は話し手と聞き手が近くにいるばあいにかぎられている。直接的な用法においては話し手だけに関連したものごとをさすことはなく、聞き手をも含めた場面でなりたつ出来事、状況をさししめす。

指さしによる身ぶりをともなう用例もあった。

ものをさすばあいと同様、同類のものごととの比較を言外に含んださし方である。

○出来事、状況をさす [コッチ、アッチ]

チー57 「～、実は、この件で、警視庁は既に第三銀行日本橋支店を内偵しはじめたそうですよ」～「明日の朝刊まで大車輪になりそうだ…(ドスを利かせて)だけど伊佐早君、こっちが終わったら、阪神銀行さんの方も徹底的に洗わしてもら

うよ」[華麗なる一族]

チー58 その時、二階から三味の音が聞こえてくる。「なかなか粋だなや」学生Aは道化で、上を指し、「おら、あつつの方がいいな、先輩」「こいつ…」[忍ぶ川]

4.6 方向をさすばあい

方向をさすばあいは、コッチ、アッチがあった。

コッチの用例は、ほとんどが話し手の方をむかせるばあいにつかわれていた。アッチの用例は、話し手が指さすある特定の方向をあらわしていた。このように話し手と聞き手が近くにいるばあい、話し手からはなれていく方向をあらわすときは、どの方向についてもふつうはアッチがつかわれやすい。しかし、指さしによる身ぶりがあれば、アッチだけではなくコッチでもソッチでもいえるのではないかとおもわれる。

シナリオの用例カードではないがつぎのようなものがあった。

チー59 「あなたはあっちへいらっしゃい、あたしはこっちへ行きますわ。お互いに後を振向かないことにしませうよ。」～行介は北を向いて京橋の方へ、襲子は南を向いて新橋の方へ歩き出した。[波]

また、次のような会話がなりたつのではないだろうか。

チー60 「このへんではお日さまはどっちからでの？」「あっち (そっち, こっち) からだ。」[作例]

チー61 「あのどこへ行った？」「あっち (そっち, こっち) の方へ行ったよ。」[作例]

話しの方は話し手と聞き手が近くにいるばあいだけだった。

指さしなどの身ぶりはある特定の方向をさすばあいには必要である。

方向には大きくわけて次のような二通りの方向がある。

1. さしめされる人、もの自体がとる方向

これにはさらに、㊸人、ものがむく方向と㊹人、ものがうごく方向がある。

2. 話し手または聞き手からみたものの方向

1のようにさししめされる人、もの自体の方向ではなく、話し手または聞き手との関係によってはじめて生じる方向である。

○さししめされる人、もの自体がとる方向——㉓人、ものがむく方向

チー62 「ハイ、それでは、撮らせていただきますよ…、花嫁さん、こちらを向いて下さい。～」[妹]

チー63 少女、顔に汗を浮かべ、足許を見乍らステップを踏んでいる。「足を見ちゃ駄目だってば…視線はこっち」 照りつける太陽の下で踊る二人。[旅の重さ]

チー64 「ピントも合っていますからね」「へいへい…これでよしと、じゃいきますからね、みんなこっちみて」 一同、姿勢を直す。「(カメラを覗きながら) じゃ写しますよ…ハイ、笑って」[男はつらいよ]

○さししめされる人、もの自体がとる方向——㉔人、ものがうごく方向

チー65 再び映画が始まり、大西洋の中央海嶺。その中央海嶺へ湧き上がってくるマントル。「ここが下から熱くなったマントルの上がってくる所です。上がってきたマントルはここでこんなふうに…こっちとあっちに分かれるから…」くっついているヨーロッパと北アメリカ、アフリカと南アメリカがその中央海嶺の線で右と左に別れ始め、次第に——離れていく。[日本沈没]

○話し手または聞き手からみたものの方向

チー66 ヤブをかいくぐってポコッと山の頂上に出る三人。眼下に広がる日本海——その海面が、朝焼けに輝いている。「わーきれい」「あの辺が満州かな?」「いや、もっとあっちだろう」[宵待草]

チー67 「坊主! どこへゆく!」「あっち!(と言って、ハッと思いかえして)ここを女の人通らなかつた?」[田園に死す]

チー68 少し遅れて五・六人の警官が、手に手に、拳銃やサーベルをかまえて、出てくる。仮眠していたのか、ろくに制服を着ていない者もある。警官の一人の肩さきからは鮮血がほとばしっている。「追え!!」「あっちだ!」「逃がすな!!」[宵待草]

場所と方向はわけがたいばあいもある。はっきりとした行く先があるばあい、たとえばチー24～27のような例では場所のカテゴリーにいられた。聞き手

にむかって「こっちにこい」といったばあいのコッチは話し手のいる場所をあらわすが、「こっちに三歩こい」といったばあいのコッチは話し手のいる方向である。

4.7 側（がわ）をさすばあい

対になっているものの一方をあらわす「がわ」にはコッチ、ソッチがあった。身体のがわをあらわすばあいと、話し手や聞き手に近いがわ、あるいは遠いがわをあらわすばあいがあった。

指さしなどの身ぶりをともなってあらわされる。

話しの場合は話し手と聞き手が近くにいるばあいにかぎられる。

次のチー69の用例で身体の方のがわをあらわすばあい、左、右どちらであっても話し手のさししめすがわであればコッチでいいあらわされる。この用例は話し手自身の身体であるが、聞き手の身体であっても話し手がさわっていればコッチでいいあらわされるとおもわれる。

○身体の方のがわ [コッチ]

チー69 ねり、ぎこちなく左の腕をなげる。「こっちの肩だったわ、体当りしたの…」
[妹]

○話し手や聞き手に近いがわ、あるいは遠いがわ [コッチ、ソッチ]

チー70 「水割りのお代りを渡したきり、二人でズウーッと話込んでいた…いや、（今西を指差し）向うの男が（吉村を指差し）こちらの若い男へ、熱心になにか話込んでいた」[砂の器]

チー71 当時の状況をそのまま再現している。「注文の水割りをテーブルの上に置いて、それから坐ろうとした」「ハイ、そしたら話があるから、向うへ行ってくれ」「それは若いほうが言ったんだね」「ハイ、こっちの人です（吉村を指差す）」[砂の器]

チー72 「どんなことを話していたのかは、そこここの間だろう」「それが…有線のリコーンをかけておりましたし、話声もあまり高くはないし」「じゃ、（今西を指差し）そっちの男が熱心に話しかけている、その二人の様子はどんな間柄に見えたかね。商売上の取引とか、友達同士とか」[砂の器]

次の用例はコチラがわで人のあつまりをあらわしている。

チー73 「陛下は、どうお考えになりますか？」 「うん…。もしかしたら、陛下は何もお考えになっておられないかもしれない…。そんな事を考えてみた事はないかね、考えているのは、むこう側とこちら側で、陛下はただ黙ってそこに
おられるだけなのかもしれないと…。」 [戒厳令]

次のソッチであらわされるのは荷物かもしれない。場面の状況がはっきりしない。一個の荷物を一人でもてば「もの」、一個の荷物を二人でもてば片一方の「がわ」になる。

チー74 「そんなにあるのかい、荷物」「(次々に荷物を運び込み乍ら)～済みません、とうさん、そっち持って頂だい」 ぼんやり聞いていた金沢、仕方なく荷物に手をかける。[女生きてます]

5 まとめ

[話しの場]

話し手と聞き手によってつくられた会話の場面には、話し手と聞き手がおなじ場所にいるばあいと、話し手と聞き手が別の場所にいるばあいとがある。

話し手と聞き手がおなじ場所にいるばあいの話しの場は、話し手と聞き手を含む一つの限られた空間からなりたっていて、互いに相手の姿をみることが出来るばあいである。たとえば、ある建物の中、建物の外、道路上などでの会話である。

- (印をつけた地図と、手榴弾らしきものを渡す) これを持ってゆけ。[戒厳令]
- 室の隅で背を向けて立っている少女に、「こっちへ来いよ」[遊び]
- 「足を見ちゃだめだってば…視線はこっち」 照りつける太陽のもとで踊る二人。
[旅の重さ]
- 「これが洲崎橋」志乃は、～石の欄干を、なつかしように手のひらでびたびた叩く。[忍ぶ川]

話し手と聞き手が別の場所にいるばあいは、話しの場が話し手と聞き手のそれぞれを中心とする二つのはなれた空間からなりたっていて、互いに相手

の姿をみることができないばあいである。この話しの場は電話による会話が典型的である。また、今回はシナリオの会話を調査の対象にしたのでとりあげなかったが、手紙の文などもここにはいるだろう。

- 「つきあいをお断りしたいのはこちらですよ。どうぞどうぞ警察にだろうが郵便局だろうが訴えて下さい、はい」 電子、ガチャンと受話器を置く。[女生きてます]
- 志乃、辺りを見まわし手紙を開いてみる。哲郎の声「…深川でいいそびれた、私のきょうだいのことを、ここにします」[忍ぶ川]

具体的なものをさすときは、話し手と聞き手が互いに相手の姿をみることができるときの場でなければ会話はなりたないであろう。しかし、場所をさすときは、話し手と聞き手が別の場所にいるばあいでもなりたつ。話し手と聞き手が近くにいる、目でみえる遠い場所をさすばあいは、アソコといえるが、話し手と聞き手が別の場所にいるばあいは、同一場所をみるわけにいかない。原則として、アソコはあらわれない。ひとをさすとき、相手の姿がみえるばあいと、みえないばあいとでさすひとがことなることがある。たとえば、姿がみえるばあいの「コッチ」は、話し手自身のこともさすことができるし、第三者をさすこともできるが、姿がみえないばあいでは、話し手自身のことしかさせなくなる。「アレ」でひとをさすとき、話し手と聞き手が互いに姿がみえるばあいであれば、その場にいる第三者をさすことができるが、姿がみえないばあいであれば、話題中の人物をさす文脈的な用法でしかつかえない。また、方向をさすときは、互いに姿がみえるばあいでなければ、そのさす方向がわからなくなる。

話し手と聞き手が同じ場所にいるばあいの話し手と聞き手の「むきあい方」には、たとえば、将棋をさしている場面での会話のような互いにむきあっているばあい、車の中で運転席と助手席に話し手と聞き手が横にならんで同一方向をむいているばあい、一頭の馬にのっているような場面での話し手と聞き手が前後になって同一方向をむいているばあいなどがある。

- 少年 将棋盤をにらんで考えこんでいる。～「王が動けばいいんだよ」「角道だもの」「左だよ。そっちは右だ。～」[田園に死す]

- 晴美が一雄の手を引っ張って近づく。ウインドウの中の背広 「わあステキ、あれ一雄さんにピッタリね」[狹山の黒い雨]
- 二人が、馬に乗って、ポクポク行く。～しのが突然叫ぶ。「見て、あれ!!」[宵待草]

ある場所をソコといったとすれば、互いにむきあっているばあいには聞き手のいる場所をさすだろうし、同一方向をむいているばあいには話し手と聞き手からすこしはなれた前方をさすだろう。

- 覗き窓から12号房をうかがう曾我看守。～「期限は来てるんだぜ。そこでもう二度といざごさは起こしませんと這いつくばってお願いしろ。出してやらんでもない…」[女囚701号さそり]
- 広縁に立ち、障子を明け放つ。芦の湖を見渡す広大な庭に逸品の石が二つ並んでいる。「鞍馬石は、そこのつつじの寄せ植えの間に置きましたよ。[華麗なる一族]

かつて、筆者が「コ・ソ・アの指示領域について」（国立国語研究所報告71『研究報告集(3)』1982年3月発行）で結論づけているように、上記の例は、聞き手のいる場所をさすばあいには対称としてのソコであり、同一方向をむいているばあいのすこしはなれた前方をさすばあいには中称としてのソコである。ただし、今回の報告はさすもののカテゴリーに主眼をおいて分類したので、上記のような用例は一括して「場所をさすばあい」としてある。
[コソアによってあらわされるもののカテゴリカルな性格]

コソアド代名詞がものやひとや場所をさすことができても、ふつうの名詞であらわされるすべてのものをさししめすことができるとはかぎらない。たとえば、抽象的な名詞である関係や属性、概念などをあらわすばあい、コソアド代名詞でいいあらわすことはできない。そのばあい、コソアド連体詞に抽象的な名詞をくみあわせていいあらわす、というように、ふつうの名詞であらわされるものにくらべてコソアド代名詞は一定の制限があるようにおもわれる。

つぎの表は、コソアド代名詞がさすものとコソアド連体詞にかざられる名詞のカテゴリーを量的に比較したものである。

○印は用例があるもの、◎印は用例が多いもの、
△印は用例が少ないもの、空欄は用例がなかったもの

	コソアド代名詞				コソアド連体詞				
	コレ ソレ アレ	コイツ ソイツ アイツ	ココ ソコ アソコ	コチラ ソチラ アチラ	コノー ソノー アノー	コソナー ソソナー アソナー	コウイウー ソウイウー アアイウー	コウイッター ソウイッター アアイッター	コウシター ソウシター アアシター
ものごと	◎ ○ ○	○ △ ◎		○ △ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○	○ △ △	△ △	△	
ひと			○	○ ○ ○ ○ ○ ○	○	△ △			△
集団	△		◎ ○ △	◎				△	
場所			○ △	○		○ ○ △ △ △ ◎			
箇所	△		○		○ ○ ○ ○ ○ △				
場面									
時間									
側面									
属性									
動作							○		
概念								△	

上にあげた表のように、コソアド代名詞のさすものは、一言でいえば、「具体的な、個別のもの、ひと」である。コソアド連体詞にかざられるものは、「抽象的な、一般化されたもの」である。

コソアド代名詞についてさらにくわしくみると、コレ（ソレ、アレ）は具体的なものをさす用例が一番多く、その他には、ひと、ものごとなどをさす。コイツ（ソイツ、アイツ）はひとをさす用例が一番多く、その他には、もの、ものごとなどをさす。ココ（ソコ、アソコ）は場所をさす用例が一番多く、その他には集団や、ものの箇所をさす。コチラ（ソチラ、アチラ）はさすことのできるカテゴリーが他の三つにくらべて多くの種類にわたっている。その中では場所をさす用例が一番多いが、もの、ひと、集団のほか、他にはみられない方向、あるものがわなど独特のカテゴリーに属するものをさしている。

なお、絵、写真、住所をかいた紙切れなど反映物のばあいには、その物理的な存在としての「もの」のカテゴリーと、反映されているもののカテゴリーがちがうことがある。たとえば、「コレはおかあさんの写真です」というばあいの「コレ」は物理的存在としては「もの」をあらわしている。「コレは

おかあさんです」というばあいのコレは反映されたものとしては「ひと」をあらわしている。このことは「場所」を反映する作品のばあいにはすこし複雑な様相を呈する。たとえば、住所をしめした紙をみせて、「スイスのアドレスはここですか」というばあい、それに「ココ」がつかわれているのは、それが場所を反映しているからであるが、そのさしかたはものをさすばあいとおなじである。また、地図や地形の模型のばあいには、地図や模型そのものの箇所をしめすものとしての「ココ、ソコ、アソコ」と場所を反映したための「ココ、ソコ、アソコ」とが出てきたりする。さらに、「ひと」をさすばあいのコレ、ソレ、アレ、コイツ、ソイツ、アイツは話し手、聞き手以外の三人称のひとをあらわすが、コチラ、ソチラは三人称だけではなく、一、二人称をあらわすことがあるというふうに、おなじカテゴリーであっても、単語がちがえばあらわすものちがうことがある。

〔身ぶりによるさししめしの性格〕

話しの場においてコソアドで話すとき、指さし、目での合図などの身ぶりによるさししめしがあるかどうかをみた。話し手と聞き手が同じ場所にいる場面においては身ぶりによるさししめしがあることが多いといえるが、ト書きが完全であるとはいえないシナリオからの採集カードであるため不明なものも多い。

- 「…(手紙を指し) 何と書いてあるの、それには？」〔妹〕
- それに、あすこの(アゴをしゃくる) 部落の者が犯人だっという噂が流れてるの、聞かれましたか。〔狭山の黒い雨〕

さすものによっても、身ぶりのありなし、さし方にちがいがある。コレ、ソレ、アレがものをさすばあいには、ふつうは指さしなどの身ぶりをとまなう。特に、対立するものをほとんど同時にさすばあいには指さしだけではなく、そのものにふれたり、もったりすることでさすものをきわだたせるはたらきをするようである。

- 「そうか、腹へってるのか、じゃこれ食うかい(と菓子を出す)」〔女生きてます〕

○（書類を差し出し）これが上大崎時代……こっちが現在の原価計算です。[人間革命]

話し手と聞き手がそばにいてコチラ，ソチラ，アチラで方向をしめすばあいには，どの方向についても指さしが決定的なやくわりをはたす。つまり，話し手によって指さされた方向はどの方向であってもコチラ，ソチラ，アチラといえるのである。

コチラ，ソチラが一人称または二人称をさすばあいや，ココ，ソコが話し手，聞き手のいる場所をさすばあいなど，また，さすべきものが具体的なものでない現象などのようなものには，身ぶりによるさししめしはないのがふつうである。

さししめしのし方は指さしもっともふつうであるが，そのほか，もっているものをさしだす，指でサインをする，視線をめぐるす，あごをしゃくる…などいろいろな身ぶりによるし方がある。

最後に，さししめしと所属物の関係についてふれておかなければならない。

ふつう，話し手のなわばりに属するものはコ系，聞き手に属するものはソ系であらわされる。しかし，つぎの例のように，(a)話し手の体や装着品，携帯品に聞き手がふれているばあい，(b)聞き手の体や装着品，携帯品に話し手がふれているばあい，には，そのさされるものが，だれに所属しているかということよりも，だれが手をふれているかということのほうがきめてになる。

(a) 例 少女，木村の頭髪を拭き始める。「ええよ，そこは…ええがな，髪が薄うなる」[旅の重さ]

(b) 例 少女の耳のうしろにひっかき傷が血を滲ませている。「あ…ここ…血が…」 指先で傷に触れようとする。[旅の重さ]

[コソアの対立のシステム]

コ・ソ・アの各系はそれぞれ他と関係なく存在するのではない。他の系とどのように対立しているか（系と系との対立）をみた。系の対立のし方には，いろいろなばあいがある。

□話し手と聞き手が同じ場所にいるばあい

◇ コ系とコ系の対立

- (プレスシートを二枚取り出し) これが朝霧, こっちが男の街, 大体の筋書が出ていますがね。[砂の器]
- (上着の内ポケットから, 絵葉書を二通取り出す) これが琴平, これが伊勢からです。[砂の器]

◇ コ系とソ系の対立

- どんなことを話していたかは, そことここの間だろう。[砂の器]
- 戸田, チョークを取り上げ, 黒板に大きく「犬」の字を書く。「～(取り澄まし)さ, 犬だ, ほしい者は持ってゆけ!」「先生, それは字じゃないですか」～「ハハハハハ, そうだよな, これは本当の犬じゃない。～」[人間革命]

◇ コ系とア系の対立

- 上がってきたマントルはここでこんなふうに…こっちとあっちに分かれるから… [日本沈没]
- やめたあ, ハハハ, あっちよりこっちがいいっ! [極私的エロス]

□ 話し手と聞き手が別の場所にいるばあい

◇ コ系とソ系の対立

- 「～どうしてそんなとこにいるのよ…」 「～なに, 迷惑をかけてる? 冗談じゃねえよ, 迷惑はこっちの方だよ, 俺だって次々仕事まわっているのをやりくりつけて年寄りの相手してやってるんじゃないか…」 [男はつらいよ]
- しかし電話では何ですから, 今すぐそちらへお伺い致します。[華麗なる一族]

◇ コ系とソ系とア系の対立

- 小野寺「今, そちらの海水の異状震動を感じたか?」 結城「ちょっと待ってくれ」その声はブツブツガリガリしている。(中略) 小野寺「(田所へ)降りると危ないのでこのまま進みます」 田所「ああ, いい…トレンチはあの泥雲の前でなくなっている。このまま真直ぐで」 小野寺, 艇を前進させ始める。… [日本沈没]

[人称]

人称とは話し手, 聞き手, 第三者の区別である。コソアドではよく話し手のなわばり, 聞き手のなわばりが問題になるが, これらは話し手そのもの, 聞き手そのものとは別の概念である。話し手のなわばり, 聞き手のなわばり

はいずれも話し手、聞き手以外の第三者に属するものである。これを混同しないために人称という概念を導入した。ただし、この報告ではコ・ソ・アがひとをさすばあいにかぎって人称を明記した。

□話し手（一人称）

- 泣かんでよ。こっちまでが悲しゅうなる。[旅の重さ]
- どうもすみません遅くなりまして、こちらからおわびの電話をしようと思ひながら。[男はつらいよ]

□聞き手（二人称）

- あなた誰？ 名前は？ 何言ってんだよ。おっことしたのはそっちじゃないか。[八月の濡れた砂]
- 下手をすると、週刊誌のスクランダルにもなりかねないことを、あえてなさるのは、何かそちらのご家族は細川家とのご縁組にご不満でもお持ちなんですか。[華麗なる一族]

□第三者（三人称）

◇ひとをあらわすばあい

- 悪いけど、俺、しばらく休暇もらったよ。これが俺の新しい女房だ。[田園に死す]
- さくら、こいつらの分も払ってやれよ、どうせロクな給料もとってねえんだろ。[男はつらいよ]

◇ひと以外で話し手のなわばりをあらわすばあい

- 少年更にコココーラの瓶を少女におしつけ、「食いすぎてのどが乾いたらよ、こいつを飲みな。」[遊び]
- 朝の七時に下田を出たんだけど！ ここまで来たら！ [日本沈没]

◇ひと以外で聞き手のなわばりをあらわすばあい

- そう、そう、詳しいことはそっちへ行って話すから… [日本沈没]
- 「(けろっとして) おばさん、それ、とってもきれい」少女の美しい目が竜子の胸のペンダントを見つめる。[女生きてます]

6 資料

資料として、シナリオ作家協会編『年鑑代表シナリオ集』1971～1974年に

おさめられたものうち、つぎの24作品から用例を採集し、使用した。このほかに、文学作品から採集した用例もおぎないとして使用した。

1971年…やさしい日本人，水俣一患者さんとその世界，婉という女，女生きてます，八月の濡れた砂，遊び，男はつらいよ一寅次郎恋歌

1972年…約束，忍ぶ川，女囚701号一さそり，旅の重さ

1973年…戒厳令，人間革命，時計は生きていた，狭山の黒い雨，津軽じょんがら節，日本沈没

1974年…華麗なる一族，極私的エロス・恋歌1974，妹，わが道，砂の器，宵待草，田園に死す

補注)

小論は，言語体系研究部第一研究室において，鈴木が，当時の室長(のちに部長)高橋の指導のもとに，調査をし，分析をして，まとめたものである。1977年に「コソアドの記述的研究(1)」を，1978年に「コソアド形容詞と名詞とのくみあわせ」をガリ版ずりで出してから，何回かかきなおしていたが，途中，「コ・ソ・アの指示領域について」をまとめたりしているうちに時間がたってしまった。今回1977年のものを土台にして，報告用にかきあらため，活字にすることにした。

小論の大部分は鈴木が執筆し，高橋が加筆・訂正するというかたちをとってできあがったものである。